

主は、生きておられる

Unser HERR lebt

2023 graph magazine vol. 61

Unser HERR lebt

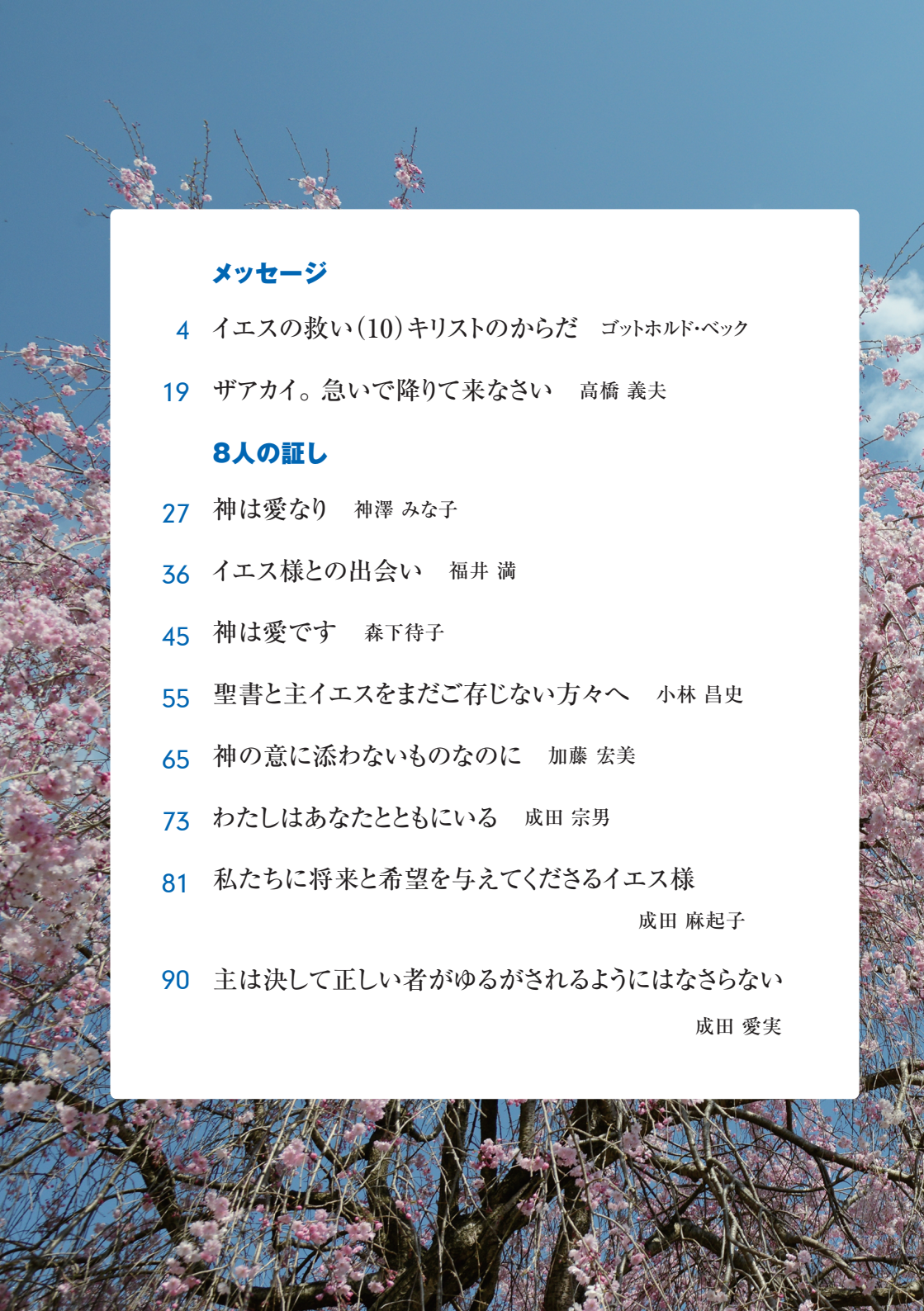
Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3･3）

vol. 61 定価100円（税込み）


Unser HERR lebt
主は、生きておられる
主は、生きておられる
Unser HERR lebt.



メッセージ

4 イエスの救い（10）キリストのからだ　ゴットホルド・ベック

19 ザアカイ。急いで降りて来なさい　高橋 義夫

8人の証し

27 神は愛なり　神澤 みな子

36 イエス様との出会い　福井 満

45 神は愛です　森下待子

55 聖書と主イエスをまだご存じない方々へ　小林 昌史

65 神の意に添わないものなのに　加藤 宏美

73 わたしはあなたとともにいる　成田 宗男

81 私たちに将来と希望を与えてくださるイエス様
成田 麻起子

90 主は決して正しい者がゆるがされるようにはなさらない
成田 愛実

イエスの救い（10）キリストのからだ

ゴットホルド・ベック

私たちは以前、神の永遠からの予定についてご一緒に学んだことがあります。（57号参照）すなわち、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられる（ローマ8・29）、また、多くの子たちを栄光に導くこと（ヘブル2・10）こそが、神の永遠からのご目的です。主なる神は、御子であるイエス様を長子として、多くの子たちを自分のものとなさりたいと思っておられます。

ところで、主なる神はあの子、この子と個々別々の子どもを欲しておられるわけではありません。父なる神のひとり子であるイエス様のために、「ひとりの花嫁」を望んでおられたのです。

イエス様の花嫁は、すなわち「教会」です。多くの子たちがひとかたまりとなった、まことの信者すべてが一つの群れとなったまことの教会がイエス様の花嫁です。まことの教会はいわゆる救われた罪人のひとかたまり、というだけではなく、主イエス様の花嫁となるのです。

そしてまことの教会とは、「キリストのからだ」です。今回はローマ人への手紙12章を通して、「花嫁」ということばは出て来ませんが、神のご目的であるキリストのからだについて学んでみたいと思います。

1．神のご目的

キリストのからだの実際的な面について考えると、それは共なる生活の必要性のことです。共なる生活とは、信者お互いがその喜びと悲しみを共にすることを言います。また同じ目的を目指す生活を意味します。

信者の群れは、お互いの「霊的成長の場所」であり、「証しの場所」、「共に戦う場所」、また「共に満たされる場所」です。主のご目的は、キリスト者がこのような共なる生活をすることにあります。それによってのみ、私たちは「かしらである主のからだ」として用いられるのです。

みことばを通して示されている事実は、「聖霊の宮」となった私たちは主イエス様と一つにされたのであり、同じ聖霊を宿している者同士は互いに一致を持っているということです。

この主のご目的を達成する手段は**十字架**です。この世の人生において示されている現実は、私たちはキリスト者として皆、戦いの中に投げ込まれているということではないでしょうか。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。

（詩篇　133・1）

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えて下さった信仰の量りに応じて、慎（つつし）み深い考え方をしなさい。

一つのからだには多くの器官があって、全ての器官

が同じ働きはしないのと同じように、大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。（ローマ　12・1～5）

この箇所から、「イエス・キリストのからだ」について学んでみたいと思いますが、その前に11章までの内容を少し考えてみなければなりません。1章から8章までは、一つにまとめて考えることができます。それに続く9章と10章はたとえを語っており、ローマ人への手紙の内容全体から見ると、括弧にくくってよいところでしょう。5章では罪の赦し、6章では私たちがキリストと共に死んでよみがえったこと、7章ではキリスト者は自らの力では何もできないこと、イエス様が全てであること、8章では神の御霊に導かれることについて述べています。そしてこの8章までの結果が、12章で述べられています。12章に入ってその始めにパウロは、クリスチャンは全てを主にささげてはじめて、主に喜ばれる者になると献身を勧めています。

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。（ローマ　12・1）

続いて5節に至って、パウロはイエス様のからだについて述べています。

私たちは「キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです」と書き記されています。同じく16章25、26節をみると、このイエス・キリストのからだは、神の「奥義」であって「世々に渡って長い間隠されていた」が、今の世（新約時代）になって明らかにされたと書かれています。主イエス様はこの奥義を私たちに現わし、示すために、この世においでになったお方です。

次にあげる問題は、キリスト者にとって非常に大切な問題です。

主が考えておられる救いと、私たちが考えている救いの間に違いはないでしょうか。私たちの十字架に対する考えと、主の十字架に対する考えとの間に違いはないでしょうか。私たちの御霊様に対する考えは、主イエス様のそれと違いはないでしょうか。

なるほど私たちは十字架の大切さをよく知っていますし、いつも十字架のみわざに感謝をささげています。しかし私たちは、十字架そのものは、主がある目的を達成されるために設けられた一つの手段にすぎない、ということを知っているのでしょうか。この主のご目的とは、「キリストのからだ」です。これに至る道が十字架です。もし私たちが本当に十字架を自分のものとして体験するなら、キリストのからだが何であるかも知ることができます。

私たちは罪赦され、救われ、神の前に義とされ、罪の支配から解放されたことを喜んでいます。このような喜びの中に、失われ滅びゆく定めにある多くの人が救われ、入れられる、ということは本当に大切なことです。しかし救いだけでは十分ではありません。**聖め**の問題を乗り越え、さらに前進しなければなりません。

主なる神が願っておられることは、滅びゆく魂が救いにあずかることだけではなく、救われた人々が勝利の生活を送り、キリストのからだに加えられることです。主は心からそれを願っておられます。

聖徒たちがキリストのからだに加えられることがどれ程大切なことか、私たちは知っているのでしょうか。キリストのからだについて語ることは簡単ですが、実際にそれを見ることは、また別の問題です。

例えば、ドイツのベルリンの街の地図を見て研究することと、実際にベルリンの街を見ることとは違います。また料理本を勉強するのと、実際に料理をすることの間にはやはり違いがあります。キリストのからだに対する教理を研究して知るだけでは十分ではありません。実際にそれを見なければなりません。

イエスの救い（10）　キリストのからだ

今日、私たちが「信者」と言うとき、ふつう主イエス様に救われたひとりの人を考えます。また救いとは、罪の赦しだけだと考えています。聖められることや主イエス様のからだが救いに含まれることを考えていません。そしてもし、私たちの群れの信者が熱心に聖書を読み、祈り、燃えているならば、それで満足しています。しかし、それは主イエス様のからだのあり方ではありません。私たちの救い、聖め、御霊の力、日々の十字架、これらがみな、キリストのからだに至る道であることを知ることができるならば幸いです。

主である神様のご目的は、ひとりのお方すなわち主イエス様と、イエス様と一つにされたクリスチャンです。イエス様とそのうちにあるクリスチャンは、神のお考えの真中に位置しています。ある人が救われると、その始めの間、その人は救いを自分ひとりのものとして自分中心に考えますが、やがてはキリストのからだにまで考えが及ぶようになります。このキリストのからだに至るための手段は十字架です。

私たちが主イエス様の一つの部分であることを知ることができれば幸いです。主である神は一つにされたキリスト者を考えておられます。かしらなるキリストと融け合ったクリスチャンを見ておられます。まことの教会はキリストのからだです。まことの教会は「からだのようなもの」とは聖書に書かれていません。事実、私たちはキリストのからだの一部であると書かれています。

私たちは本当にイエス様と一つにされたことを知っているのでしょうか。この「イエス様と一つにされた」ということは、実際にそうされたのだということを深く知っているのでしょうか。

有名な中国の伝道者であるウォッチマン・ニーは、信者たちにキリストのからだがどのようなものであるか説明するために、ある日曜の朝、聖餐式の時、パンを裂きました。一つのパンを皆の前で裂いて見せた後で、彼はコリント人への手紙第一 10章17節を読みました。「パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの者がともに一つのパンを食べるからです」と。それから彼は信者たちにこう説明しました。

先程ここに一つのパンがあった。あなたがたはこの一つのパンから食べた。裂かれたそのパンをもう一度もとに集めれば、もとの一つのパンになる。決して二つのパンにはならないと。

キリストのからだもこれと全く同じです。生まれ変わったクリスチャンはイエス様の霊をうちに宿し、イエス様の一部分となったのです。生まれ変わった信者の中に、主イエス様は聖霊によって住んでおられます。主イエス様はパンのように裂かれるお方ではありません。ですから主イエス様とすべてのクリスチャンは、全く一つです。御霊様を宿しているキリスト者たちは一つであって、分けることができない、ということは動かすことのできない事実です。

これを実際に、信仰によって自分のものとする程度に従って、主のからだの栄光を経験することができるのです。この場合も私たちの信仰に従って、この奥義が開かれ、示されてきます。

主イエス様は「あなたの信じたようになる」と、今日もみ声をかけておられます。主は「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る」と約束しておられます。

主イエス様は、一人ひとりバラバラのクリスチャンに満足しておられません。私たちが心から主イエス様を信じるなら、そのとき御霊は私たちの心に宿り給います。そのとき私たちはキリストのからだになることができます。そして、このからだに対して、神はみこころのすべてを傾けてくださいます。

次にキリストのからだの実際的な面を見てみましょう。

まず第一に、私たちは心の目を開いて、主イエス様が何を願っておられるか、主のみこころを知らなければなりません。私たちは、ただ自分自身のために、霊的な経験を得ようと務めているのでしょうか。また、ま

イエスの救い（10）　キリストのからだ

だイエス様を信じておられない方を自分たちの群れに加えようとのみ務めているのでしょうか。私たちはいろいろな伝道をしますが、そのとき滅びゆく魂が天国へ行くようにと、それだけを考えているのでしょうか。

それとも、キリストのからだが満たされ、完全になることも願っているのでしょうか。もし「キリストのからだが満たされるように」という願いを持つなら、私たちのものごとを見る目がいろいろな面で変ってきます。

2．十字架の目的と内住の御霊によって

「キリストのからだ」の教えだけを知ることは、そんなに大切ではありません。ローマ・カトリック教会でさえ、この教えを持っています。彼らは、からだは一つなのだから、教会も一つであると教えます。ところが、このカトリック教会は聖書と違った「かしら」を持っています。彼らのかしらはローマにいます。

聖書で言っている私たちキリスト者のまことのかしらは、天におられる主イエス様です。人がキリストのからだの教えだけを持ち回って、その教えのように教会を造ろうと思ってもできません。それを実際に「心の目」で見なければなりません。

教会がイエス様のためにどんなに価値があるかを、主イエス様ご自身が私たちに教えてくださる時、そこに、何が起こるでしょうか。その結果は、一つの新しい知識が加えられるというだけにとどまりません。必ず、その人のうちに何かの革命が起こるのです。いろいろなことが変えられていきます。

人々はどのようにして、キリストのからだになることができるのでしょうか。自分の力であれをやり、これをやる結果ではありません。ただ主イエス様を心のうちにお受けすることによって、キリストのからだとなることができます。私たちがどのような者であるかは、全く関係がありません。主イエス様が私たちのうちに住んでおられるか、おられないかが、ことを定めます。天から下って来られたいのちのパンである主イエス様を心のうちに受け入れて、あなたはイエス様のからだとなったのです。キリストのからだは、とりもなおさず主イエス様です。

パウロはコリント人への手紙第一 12章12節に次のように書き記しています。

> ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。（1コリント 12・12）

パウロはここで、何を言いたかったのでしょうか。パウロは主イエス様とキリスト者は分けられるものではなく、全く一つであるということが言いたかったのです。主イエス様はかしらです。そしてからだである信者のうちには、イエス様と同じ永遠のいのち、御霊が宿っていますから、からだもイエス様です。

主イエス様のからだになるには、内住の御霊様によってだけ可能です。それによらないものは主に属しません。むしろ「教会」の妨げとなるばかりです。もしキリストのからだを心の目で見るなら、己（おのれ）につけるものはすべて除かれなければならないことが分かります。このために十字架が必要なのです。

十字架は、自分の考え、自分につけるもの、すべてが除かれるために主が用いられる手段です。

ある人々は賢く、神のことをよく理解し、主に器用にご奉仕します。しかし教育のない田舎のお婆さんの方が、教育を受けた人々よりもよほど深く主イエス様ご自身を知っているということがよくあります。これは、生まれつきの知恵ではイエス様のことを知り得ず、神の知識は上からしか与えられず、主に対するご奉仕も、上からの力を着なければできない、ということを私たちに教えてくれます。

私たちの自らの力は砕かれ、自らの能力に絶望しなければまことのご奉仕はできません。もしエペソ人へ

イエスの救い（10） キリストのからだ

の手紙を、「どうか主よ、この時代におけるご自身のみこころを教えてください」と、へりくだった心で読むなら、主はキリストのからだを私たちに示してくださいます。

教会は神の目指すところです。私たち自ら出るものは全て抹殺されなければなりません。十字架の目的はキリストのからだです。十字架によって、自らにつける自己中心で神に反するものは全て聖められなければなりません。そして日々、十字架につけられ、聖められ続けなければなりません。

私たちが自分の力でキリストにあずかることは決してできません。ですから、私たちのうちに十字架が負わされなければならないのです。困難や苦しみを通されなければならないのです。

私たちはキリスト者になってからも、決して悪い習慣ではないが、主から出たものでない習慣を持ち続けることがあります。やがて、それは主のみこころにかなわないことを上から教えられ、その習慣から離れなければならない時がやってきます。それは苦痛を伴いますが、そのようにしてキリストのからだが建て上げられていくのです。

自分勝手な道を歩んで行くところに、キリストのからだは建て上げられていきません。あなたはキリストのからだとして、自分の欲するままには行うことができません。たとえば指を動かす時、筋肉も一緒に動きます。筋肉だけをそのままじっとさせていたいと思ってもできません。キリストのからだも、かしらであるイエス様に従わなければなりません。

3. 主にある共なる生活

私たち全員が、私は主のからだであり、自らの力で思いの向くままに一歩も歩むことのできない者だ、ということを知ることができれば幸いだと思います。

あらゆる個人的なものは捨て去らなければなりません。かしらとほかの肢体から離れて自分だけの道を歩

むことはできません。私たちは霊的に前へ進むためにはひとりではだめです。どうしても、他のクリスチャンと共に生活することが必要です。私たちはほかのクリスチャンと一緒に主にゆだねていかなければなりません。ひとりでは、主の欲したもうように主に仕えることは決してできません。

この共にする生活を教えるために、主は私たちをいろいろな悩みや苦しみや困難の中に導き入れてくださいます。私たちは主イエス様を必要とするのと同じほどに、主にある兄弟姉妹との交わりを必要としています。なぜならイエス様のいのちは、教会全体に、すなわちキリストのからだ全体にしみ込んでいるからであり、私たちに与えられる賜物は、すべてキリストのからだを建て上げるために与えられるからです。

キリストのからだは、生まれつきの性質と全く反対のものです。キリストのからだは、聖さと他の聖徒に対する全き信頼のうちに建て上げられていくものです。

一方、人の生まれつきの性質は罪のうちにあり、他の人々を心から信頼できない、という性質を持っています。罪の赦しと生まれつきの性質からの解放に心を留めるばかりでなく、さらに進んでキリストのからだにも、心の目を開いていきたいものです。

多くの人々は、自分が自分のために多くの実を結ぶことができるよう聖められることを願っていますが、キリストのからだのために実を結ぶことを考えません。十字架は、私たちが自らの道を選びとることに死んで、ひとり離れた信者になるのではなくキリストのからだに加えられたのだということを私たちに教えています。もしこれを知るなら、私たちは他の信者との交わりがどんなに尊いものであるかわかるでしょう。そのとき、ねたみはなくなり、自分を高める心は消え去り、自らのために働くものはなくなるでしょう。自分の願い、自分の目的はどこかへ行き、ただキリストのからだを建て上げることが唯一の問題となるのです。

私たちは多くいてもキリストのからだであることを、深く悟りたいものです。これは御霊様だけが教えてく

ださることです。御霊によりこれを教えられる時、私たちの生活はいろいろな面で変えられます。

4. 栄光の教会

これまで述べてきたことについて知り、よく考えていくと、「教会の支配」という問題も自然に解かれていきます。あらゆる人間的な支配は、神の御座におられる主のみこころに逆らって立ちます。人間的な支配が行なわれる時、イエス様が教会のかしらではなく、ひとりの人が教会のかしらになってしまいます。そうなると教会は神の宮ではなくなり、一つの宗教に堕ちてしまうでしょう。教会の中で誰が支配者であるか、人間か、主のみか、この問題はいつの時代にもあります。

旧約聖書の中で、ダビデの例を見てみましょう。イスラエルの民は、新約時代のキリスト者の群れである教会と同じく、神に選ばれた人々でした。そして新約聖書ではイエス様が油注がれ全く御霊に満たされたと同じ様に、ダビデは神の選びの民イスラエルの指導者、王として、神によって御霊に満たされました。しかしダビデがまことの指導者となるまでには、非常な戦いがありました。

始めにダビデは、外敵ゴリアテと戦わなければなりませんでした。ゴリアテはこの世の人を意味しています。

次にダビデは、内敵と戦わなければなりませんでした。すなわちサウルとの戦いです。サウルは、最初はダビデと共に力を合わせて外敵ペリシテ人と戦いましたが、後にダビデをねたみ、信仰を同じくする者でありながら、ダビデと戦うようになりました。ダビデを除こうとしたのです。

サウルは、神に選ばれ、神の子とされた人々の間にある、あらゆる組織や制度を象徴しています。もちろんサウルは、イスラエル人の中で一番背が高く、また学識にも秀でていましたが、神のみこころに逆らっていました。ゴリアテがダビデの手によって打ち倒されてから、サウルに本当の支配力はなくなってしまいました。

主イエス様は今日、教会の完全な支配者となられることを願っておられます。そのためには、まずこの世をあらわすゴリアテを打ち倒さなければなりません。私たちはこの世に住みながら、この世から全く分離されなければなりません。

私たちの戦いは血肉に対する戦いではありません。人間に対する戦いではなく、目に見えるものに対する戦いでもありません。私たちの戦いは天上にいる諸々の悪霊に対する戦いです。この目に見えない霊の力に打ち勝つ時、主の御力が私たちの前に、さやかに現われてくるのです。

主なる神は、主イエス様とそのからだが共に支配されることを願っています。もし私たちがローマ人への手紙5章から8章を確実に体験するなら、主は私たちを12章に導いてくださり、私たちはキリストのからだを知るに至ります。十字架は右に曲がり、左に曲がることなく、私たちをまっすぐにキリストのからだにまで導いてくれます。ここに至る時、かつて経験したことのないことが、私たちのうちに起こるはずです。

多くのクリスチャンは、「主のために私はすべてをささげた、十字架のまことの意味を知った、信者たちはイエス様と一つにされ、イエス様と一つからだであることもわかった」と言いますが、その人のうちに何も起こりません。それはどうしてでしょうか。

これは心の目で、本当にキリストのからだが何であるかを見ていないからです。主イエス様が私たちの心の目を開いてくださり、霊的に見えるようにしてくださったら幸いです。そのときに、今まで起ってきたあらゆる苦しみや誤解や悩み、それらのものはすべてキリストのからだが何であるかを知るために必要であった、ということがわかるでしょう。あらゆる困難を通して、私たちは有能な、用いられるキリストのからだの一部となることができます。自分からは何の良いも

のも出ない、自分から出るものは何の価値もないものだということを知る時、主に用いられる肢体となるのです。

主イエス様のみこころはエペソ人への手紙5章27節に、はっきりとまとめられてあります。

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。（エペソ　5・7）

「しみ」がないということは、すべての罪がかき消され、その痕跡もとどめていないということです。「しわ」がないということは、しわは年寄りのしるしですから、過去のあらゆる失敗、思い煩いが、今はすっかりなくなっているということを意味しているのです。その類のものがないというのは、サタンや悪霊や人に足をさらわれるようなところが全く取り去られてしまっているということを意味しています。

私たちが今生きている末の世は、まもなく終わってしまいます。サタンの力はいよいよ強くなり、あらわになってきます。私たちの戦いは、天上にいる諸々の悪霊に対する戦いです。私たちは悪霊に打ち勝つために、悪霊を打ち負かすために立てられています。これに勝利を収めるには、ひとりの力ではどうすることもできません。何としても、一緒に戦うことが必要です。

よみの力は教会に、キリストのからだに打ち勝つことはできないと、イエス様は約束してくださったのです。私たちは自分ひとりで信仰生活を生きることを止めて、共に交わりのうちにあって戦っていくなら、パウロが言うように、これらすべてのことにおいて勝ち得てあまりがあると、勝利の叫びをあげることができるのです。

最後にこのキリストのからだに関する聖書箇所を読んで終わりたいと思います。

わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。（マタイ　16・18）

私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの者がともに一つのパンを食べるからです。（1コリント　10・16、17）

ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そして全ての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。（1コリント　12・12～14）

もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。（1コリント　12・26～27）

また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ　1・22、23）

こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方にあって、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリ

イエスの救い（10）　キリストのからだ

ストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。（エペソ　2・19～22）

それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ　4・12～16）

本当に、私たちが皆、主のからだなる奥義を心の目で見ることができ、そして喜んで、共なる生活に入るようになれれば、すばらしいことだと思います。自分ひとりだけで信仰生活を送ることをやめ、共に交わりのうちに入って戦っていくならば、まさしく圧倒的な勝利者となることができるのです。

本メッセージは、「ロバの子サーバー」の「ベック兄　暦年ファイル」に録音されています。

次回掲載予定は、「イエスの救い（11）どうすれば主のしもべとなれるか」です。

ザアカイ。急いで降りて来なさい

高橋義夫

今から二千年前、イエス様は、その地上での生涯の最後の旅で、エリコと言う町を通って、エルサレムへ上る道を進まれました。新約聖書「ルカの福音書」は、イエス様がこの最後の旅で、ひとりの嫌われ者の取税人と出会った話を記しています。

それからイエスは、エリコにはいって、町をお通りになった。ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。（ルカ　19・1～3）

ザアカイ。急いで降りて来なさい

ここから、ザアカイさんについて、いくつかの情報を得ることができます。まず、エリコに住んでいた。名前はザアカイ。職業は取税人。そしてお金持ち（すごく裕福）。さらに、背が低かったという身体的特徴もうかがえます。聖書には、詳しく記されていませんが、当時の歴史的な背景なども想像しながら、ザアカイさんとイエス様の出会いについてイメージしていきましょう。

エリコの町

まず、ザアカイさんの住んでいたエリコの町です。有名なエルサレムは、標高が七百五十メートルの高台にあります。エリコは、エルサレムから東にヨルダン

川の方へ下って、標高が、マイナス二百四十メートルで、海面より低いところにある町です。世界的にもすごく低いところにある町としても有名です。この時のイエス様の旅は、エリコに立ち寄って、そこから逆にエルサレムへ登られています。たいへんな旅だったことでしょう。

イエス様の時代のエリコは、西のユダヤと東のヨルダン川の向こう側のペレヤ、そして北のガリラヤとを結ぶ道が交差し、商業の要です。そして、ヨルダン渓谷の農業生産の中心でもありました。そして、エリコは、ずっと昔より、泉が湧く砂漠の旅のオアシスとしても運輸の重要な地点です。ラクダで旅する商人たちは、エリコのオアシスで休憩します。オアシスの泉でラクダに水を飲ませたことでしょう。

ラクダにどんな荷物が載せられ運ばれたのでしょう。お化粧品になるような香油といった贅沢品もあったかもしれません。そして、香料、お料理に使う香辛料、穀物、衣類。油、オリーブ油に、バルサム油。生活必需品から贅沢品までいろんなものが、東から西へ。西から東へ、北から南へ、ラクダに積まれてエリコの町を通ったことでしょう。その隊商達から、関税や通行税を取りたてるのが、エリコの取税人という仕事でした。

取税人という職業

イエス様の時代、ローマ帝国はカペナウムやエリコのような町では通商関税をローマ政府の役人が直接取り立てるのではなく、現地のユダヤの民に、民間委託していたことが聖書からもうかがえます。おそらく、入札制度があって、徴税権を落札した地元のユダヤ人が、同胞からの取り立ての実行部隊となったようです。ローマ政府としては、地元民との摩擦を避けられるし、確実に税収入を得られるし、一石二鳥です。

そのエリコの町の徴税権の落札者、あるいは実行部隊の元締めが、ザアカイさんではなかったかと想像されています。落札した金額を、決められた期日にローマに払わなければなりませんし、ローマに払う金額以上を徴収しないと、自分の利益が生まれません。

なかには、相当悪質で強引な徴収もあったと伝えられています。五キロの穀物も、七キロと量ればたくさん関税がとれます。升を少しだけ小さくして騙せば、三升の油が四升になってたくさん税金がとれます。もっと徴税したかったら、道に通行税を課すこともできたでしょう。そして、その徴収した税金の多くの部分は、自分たちを侵略したローマに手渡されるのですから、ユダヤ民族にすれば、取税人は裏切り者と軽蔑される対象でした。たとえば、シナゴーグ（みんなの会堂）に寄付をしようとしても、「汚れた金はいらない」と拒否されました。裁判での証言は許されず、ユダヤ社会における社会的地位ははく奪されていました。

不思議の(1)　イエス様を見たい

今回の福音書に記されたストーリーで、まず不思議に思うのは、そんな取税人として成功していたザアカイさんが、イエス様を見たいと思ったことです。

彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。（ルカ　19・3、4）

ザアカイさんは背が低かったので、群衆のためにイエス様を見ることができません。もし興味本位だったらあきらめたでしょうが、ザアカイさんはあきらめないで、「いちじく桑」と言う木に登りました。実は、エリコの町に観光へ行くと、きっとこんな木にザアカイさんが登ったのでしょうと、「ザアカイさんの登ったいちじく桑の木」と囲いをされたいちじく桑の木が観光名所になっています。

さて、「お金持ちになってやる。だまし取ってもかまわない」と、嫌われてもかまわない。そんな生き方をザアカイ。急いで降りて来なさい

していたと想像されるザアカイさんは、イエス様を見たい、どんな方か見て見たいという思いを与えられました。不思議ですが、聖書は、その不思議を説明せずに私たちの想像を求めます。ザアカイさんは、毎日、たくさんのお金を徴収して、どんな気持ちでお金を数えたのでしょうね。それは、寂しくて孤独な夜だったのでしょうか。

不思議の(2)　ザアカイさんの名前を呼ぶイエス様

さて、そんなザアカイさんに、驚くべきことが起きてしまいます。

イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」
（ルカ　19・5）

ザアカイさんは、隠れてイエス様をそっと見れたらいいと思っていたのではないでしょうか。けれどもイエス様は、ザアカイさんの下に来られると歩みを止められ、ザアカイさんを見上げ、そしてなんと、ザアカイさんの名前を呼んだのです。イエス様がどうしてザアカイさんの名前を知っていたのでしょうか。

私は、イエス様は何もかもご存じだったような気がします。エルサレムの十字架に向かわれるこの大事な時期にエリコを通られたことからして、ザアカイさんに会おうとされていたように思います。ザアカイさんの心の中の満たされない部分も、みんなご存じだったのではないでしょうか。イエス様は、「ザアカイ」と名前で呼びかけられました。そして、木の上から隠れて見ていたザアカイさんに、「急いで降りて来なさい」と呼びかけられました。

不思議の(3)　ザアカイさんの家に泊まるとおっしゃるイエス様

さらに、もっともっと驚く事が起こりました。ザアカイさんの名前を呼んだイエス様が、「あなたの家に泊まることにしてあるから」と言われるのです。びっくりです。イエス様のお弟子さん達でさえ、びっくりしたと思います。イエス様は、その時すでに、エルサレムのえらいユダヤ教の先生達からも、危険人物とされていました。命の危険もあるほどだったのです。イエス様の回りの人たちは「ザアカイですって。評判の悪い、罪人となじられている取税人の家に泊まって仲良くするなんて、とんでもない」と思ったでしょう。けれども、イエス様は宣言されるように、おっしゃったのです。

「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」　（ルカ　19・5）

なんというおことばでしょう。

ザアカイ。急いで降りて来なさい

さて、聖書の語る「罪」「罪人」は、神様との関係を断たれていることを意味するとても深いことばですが、世の中の人が「罪人」と言うとき、そのことばは、しばしば社会的には都合の悪い人たち、自分たちに都合の悪い人たちを排除し差別するためにも用いられてきました。ローマ帝国の手先になって、徴税に協力する取税人は、ユダヤ社会にとって都合の悪い人たちでした。ユダヤ社会は、「罪人」としてレッテル貼りすることで、自分たちのコミュニティーから取税人たちを排除しようとしていました。ザアカイさんも、ユダヤのコミュニティーからは排除されてきた人でした。

弟子達が心配するほどに、イエス様はそんな社会の風潮に一切おかまいなしに、ザアカイの家に親しく泊まるとおっしゃったのです。常識では考えられません。

大喜びのザアカイさん

このイエス様のお声がけに、ザアカイさんは、どうしたのでしょうか。　聖書は、次のように記しています。

ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。（ルカ　19・6）

イエス様の呼びかけの声は、どんなふうにザアカイさんに聞こえたか想像してみませんか。私は、冷たく満たされなかったザアカイさんの心に、突然、暖かい日の光がさすように、暖かな風がザアカイさんの心に吹いたように思います。村人たちは、ザアカイを見て、裏切り者、罪人、汚い取税人と軽蔑しました。けれども、イエス様は、ザアカイに親しく名前で呼びかけただけではなく、ザアカイさんの家に宿泊することに決めてあるからと言われるのです。

ザアカイさんは、いちじく桑の木の上で葉っぱに隠れて、イエス様を見ていました。けれども、イエス様は「隠れなくていいよ。そのままでいいよ。安心して降りておいで」と呼びかけられたように思います。

木から降りてイエス様に出会ったとき、ザアカイさんに、大きな変化が起こりました。「そして、大喜びでイエスを迎えた」と聖書は記しています。読んでいて、こちらもうれしくなってきますね。

町の人たちは、取税人のザアカイさんを嫌って相手にしてくれなかったでしょう。でも、イエス様は、親しく呼びかけたばかりか、ザアカイさんの家に泊まりますと宣言されたのですから。

聖書の詩篇に、孤独でひとりぼっちの人の描写があります。

私は荒野のペリカンのようになり、廃墟のふくろうのようになっています。私はやせ衰えて、屋根の上のひとりぼっちの鳥のようになりました。（詩篇　102・6、7）

「ペリカン」も「ふくろう」も旧約聖書の時代から忌み嫌われる動物でした。そして、「私」は、屋根の下の暖かな団欒、交わりから疎外されて、屋根の上のひとりぼっちの鳥のようでした。これは、ザアカイさんの姿ではないでしょうか。そんなザアカイさんに、イエス様は、名前を親しく呼んで、あなたの家に泊まるからとおっしゃったのです。

悔い改めるザアカイさん

イエス様の優しいご愛に触れた時、ザアカイさんの心に悔い改めが起こりました。

ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」（ルカ　19・8）

今まで、貧しい者からでも、誰からでも、だましてでも、取れるだけ取り上げて徴税してやると歩んできたザアカイさんが、イエス様のご愛に出会ったとき、なんと言う変化が起こったのでしょう。全財産の半分を、貧しい人に施すと宣言してしまったのです。そして、だましとった物は、倍返しではなくて、四倍返しするとまで言いました。ザアカイさんは、よほどうれしかったのだろうと思います。

イエス様の救いの宣言

イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」（ルカ　19・9、10）

イエス様は、失われていたものが、取り戻されることが、「救い」であると言われます。私たちは、自分勝手に自分の道を歩んできました。愛の少ない私たちは、大勢の他者を傷つけます。そして何よりも、創造主なる神様との関係が断たれています。そうした姿が、罪の中にあるみじめな私たちの本当の姿だと聖書は語ります。

ザアカイさんは、コミュニティーから疎外されてお

ザアカイ。急いで降りて来なさい

り、なによりも神様から断絶した生活をしていました。そして、隠れて、そっとイエス様を見たいと思いました。けれども、イエス様は、ザアカイさんの名前をご存じでした。ザアカイさんを知っておられ、「降りて来なさい」と呼びかけられました。

「降りて来なさい」とは、「隠れていなくていいよ。あなたのままでいいよ。あなたの所に泊まるよ。そして、あなたは『アブラハムの子』神様に愛されている者だよ」と宣言されたのです。「神様が自分を愛されている」。ザアカイさんは、どんなにびっくりして、そしてどんなに嬉しかったでしょう。

イエス様の自己紹介

イエス様は、最後に、ご自分のことを「失われた人を捜して救うために来た」者ですと自己紹介されました。

この事件の後、一週間でしょうか。十日でしょうか。イエス様は、ゴルゴタの丘で十字架にかかられます。

「お前達の罪も汚れも、みんなわたしが背負ってあげるから…」。ザアカイが犯した罪のすべても、イエス様は背負われます。ザアカイさんの所に泊まられたイエス様と大喜びのザアカイさんは、どんな話をしたのでしょう。

福音書を通して、イエス様について言えるひとつのことがあります。イエス様がザアカイをご覧になったように、イエス様の眼差しのいつも中心にあるのは、一番弱く、悩み、苦しんでいる貧しい人々でした。そして、私も弱く貧しく悩んでいますと告白できる人のなんと幸いなことでしょう。



高橋 義夫（大阪キリスト集会）

神は愛なり

神澤 みな子



みな子さん、深大寺の茶屋で

私は昭和十年、富山県高岡市で生まれ、高校卒業までを過ごしました。立山連峰の山々に囲まれて、まるで「神」がそこに住んで毎日守ってくださるかのように思える、このふるさとの景色が大好きでした。

信仰に導かれるまで

私は幼い頃、キリスト教会の付属幼稚園にお世話になったことがきっかけとなり、高校卒業後、金沢市にあるミッションスクールで学ぶことになりました。そこで、信仰への熱心な勧めと祈りに促されて、二十歳で迎えた卒業の春に、滴礼を受けました。「神は愛なり」「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」――聖書のみことばは深く理解できませんでしたが、これが自分の生涯の信念として生きるように示されました。クリスチャンになった自覚はあったものの、私は本当の意味で「イエス・キリストの救い」を知らず、夫と結婚してからの人生の荒波の中で、悩み、うろたえることの

多い日々でした。自我が強く、素直に人や物事を受け入れられない自分がいつもいました。

私の夫は昭和五年、チューリップで有名な富山県砺波市で生まれ、穏やかな農村の中で、両親に大変愛されて育ちました。そのためでしょうか、成人した後、私と結婚してからも、何ひとつ不満をこぼすことは無く、長男が生まれて間もなく、結核のために休職し長期療養をすることになった時も、人生の試練と受け止めて、静かに自分の苦難と忍耐を持って乗り越える人でした。

一方、私は乳飲み子を抱えて、頼る人のいない都会生活の中で悶々と過ごしていました。

いったい、私の信仰はどこへいってしまったのかと、情けない思いで日々を送るうちに、体調も崩れていきました。流産を繰り返した後、ようやく長女が与えられた頃には、心身共に疲れ、不眠に悩まされるようになりました。医者にかかっても眠気ばかりが増す安定剤では、主婦としての生活ができないので、もう一度聖書に立ち返りたいと願うようになりました。

その頃、長男が通う幼稚園のお友達のお母様が教会へ集っておられることを伺い、その教会へ恐る恐るご一緒させていただきました。これが吉祥寺キリスト集会とベックさんご夫妻との出会いでした。

だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。

（ヨハネ　7・37、38）

イエス様は、私をご自分の群れへと導いてくださいました。今まで教会へ通い、「滴礼」は受けたものの確信のない私の告白に、ベックさんは「吉祥寺集会で毎週もたれる婦人の集まりに来るといいよ」と優しくおっしゃいました。孤独でもがいていた私は、早速集わせていただきました。お茶と焼きたてのケーキを囲んでの少人数の集いでしたが、ミンヘンさんが丹精こめて育てておられた、窓辺の真っ赤なゼラニュームの花々に心が安らぎ、ベックご夫妻と五人のお子さんたちの暖かいお宅にたどり着いて、スッと心の重荷が取り払われた気持ちになりました。

吉祥寺キリスト集会へ集い始めて間もなく、集会所の近くに住んでおられる集会の方の御主人様の葬儀がありました。キリスト教の葬儀は初めてで、誘われるがまま私もお宅での葬儀に参列させていただきました。きらびやかな仏壇ではなく、十字架とお花が遺影に供えられただけの簡素なしつらえでしたが、語られたメッセージは私の心を揺り動かすものでした。初めて、イエス様の十字架の犠牲の血潮によって、私たちの罪が全く赦されたことを知りました。またこれからも犯すであろう私の罪を、イエス様を仰いで告白すれば、雪のように聖くしてくださる「救い」の約束を知りました。地上の生涯が終わっても、永遠のいのちが約束されている希望のあるお葬儀でした。

イエス様は私の十年あまりの荒野の旅の果てに、ご自分の十字架の愛をお示しになり、罪から解放してくださったのです。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。

（ローマ　3・23、24、28）

「イエス様、ありがとうございます」それまでの「闇」から「光」へと移していただいたことが嬉しく、モノクロからパッと美しい色彩の世界へ導かれたことが、強く心に残りました。

8人の証し

Unser HERR lebt

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。こういうわけで、私たちは、主を恐れることを知っているので、人々を説得しようとするのです。

（2コリント　5・10、11）

それから約十年間、私は吉祥寺キリスト集会で充実した学びや集いの時を過ごしました。聖書に記された神の厳しさと、キリストのとりなしの大切さについて、夫にも繰り返し伝えたのですが、日本経済が好調な時代で、日々仕事に追われていた夫は、福音に対して一向に聞く耳を持たず、私は悶々として夫の救いを祈りくれました。私の淋しさを察した夫は、日曜日にはフリーウェイを縦横に運転して、遠いダウンタウンにある日本人教会の礼拝に同行してくれました。そこで百歳を超える日系人の御老人たちが、戦争の厳しい時代を経てなお鬘鑠とされている姿、また、幼子のように謙虚に礼拝を捧げている姿を見て、夫もやがてそのような信仰を持ちたいと願ったようです。

渡米の際に、夫の足手まといにならないようにと運転免許を取得しましたが、教会からの帰り道、恐る恐る運転する私の車と、猛スピードで疾走してきたパトカーと交差点で出会い頭にぶつかり、パトカーを大破させてしまう事故に見舞われました。心身共に傷つき、世界が真っ暗になる体験をイエス様からいただきました。

わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者

京都、ロサンゼルス転勤

吉祥寺キリスト集会に導かれて喜んでいた私ですが、一九六九年に夫の勤めの配属が京都となり、私たち家族は関西へ住まいを移すことになりました。吉祥寺キリスト集会での集いを離れ、約二年半を京都の西京極での集会へ集いました。二人のイギリス婦人の宣教師や集会の皆さんとの語らいの場が与えられ、偶像礼拝の土地柄にもかかわらず、イエス様の十字架を伝える宣教の熱心さを見せていただきました。この間に、その集会の伝道者の沖見寅雄さんより水の洗礼の恵みにあずかりました。

一九七二年、夫が再び東京勤務となり、私は吉祥寺キリスト集会に戻ってきました。ベックさんのメッセージの中で気がついたことは、イエス様によって約束された永遠のいのちが決して自分だけのものではないこと、主はその救いを夫や家族、友人にも伝えるよう望んでおられることでした。

続ける日々でした。「イエス様、夫も救われて神様の恐ろしいさばきから免れるようにしてください。私のなすべきことがあればお示しください」。

その後、思いがけず夫のロサンゼルスへの転勤が決まり、これは祈りのお答えと受け止めました。子供たちに東京の留守宅を預け、海外で夫と二人だけの暮らしを始めることになりました。海外生活はもとより、車の運転や英会話など初めての挑戦に、私はイエス様に頼るほかなく、日々イエス様の力をいただきながらようやく夫の助け手としての二年間を過ごしました。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。

（ヘブル　11・6）

聖書のみことばが私を励まし、背中を押し出して

8人の証し

を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。（ヘブル　12・5、6）

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。（ローマ　8・26）

私は御霊の働きによって、現実の苦しさをイエス様にゆだねることができたのです。

ロサンゼルスでの二年余りの生活では、私の願いであった夫の救いは叶いませんでした。しかし、求めるたましいとの出会いを祈って始めた我が家での小さな聖書の集いに、主は次々と訪れる方を送ってくださいました。テープで聖書のメッセージを聞き、みことばを学んでからいただくお茶とケーキの語らいは、素直にイエス様へと心が開かれ救いを求めて祈る方たちが生まれました。日本にいる親や兄弟を懐かしく思い、共に祈ることができましたのも主が備えてくださった恵みでした。それぞれの家族が日本へ帰国した後も、主にある語らいの場が与えられ、三十数年たった今も続いています。

夫の救い、召天

帰国の後、私は再び吉祥寺キリスト集会へ戻ってきました。そのころ集会では、ベックさんご夫妻の娘さんのリンデちゃんが若くしてがんで召され、その死を通して証しされた「永遠のいのち」の尊さがあふれるように語られていました。聖書が約束する永遠のいのちを、私も集会の皆さんと共に心から願う者へと変えられました。私の願いはまもなく、重田さん宅での荻窪家庭集会の集いへ導かれることになりました。夫もそのお声掛けには素直に心を開き、毎月楽しみに参加いたしました。福音の恵みにあずかる時となりましたが、夫は自分の知恵と力で主を求めようとして、長らく踏み込めずにもがいていました。

そんなある日、広島へ転勤した長男から結婚について相談の電話が入りました。長男の幸せを願う父親として責任を感じ、自分の思いだけで応えてよいのか、と狼狽する夫を初めて見ました。そして思い余って主に心を向けて祈ったのです。私と長女もすべてのことを守り導かれるイエス様に相談するのが一番だよ、と賛成しました。長年集会のみなさんに祈られていた夫の救いは一瞬にして導かれ、夫が六十歳の時にベックさんより洗礼を授けていただきました。

帰国、荻窪家庭集会、長男の結婚、とイエス様は導いてくださり、夫と共に心を合わせて祈る日々が始まりました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

イエス様の救いをいただいた私たちは、ふるさとの親しい友や親族にも福音を伝えたいと祈りました。重田さんご夫妻が夫の実家（砺波市）に足を運んでくださり、父や兄夫婦や近所の方たちを交えて十字架のみわざと復活と永遠のいのちについてお話しくださいました。父が福音をとても喜んで聞いてくれたことは本当に感謝でした。

ようやく夫と信仰を共にして歩むことが叶って喜んでいたのですが、夫は定年後に肺線維症という呼吸器の苦しい病気を与えられました。希望を持てずに暗くしずむ夫を何とか助けてくださいと祈った私に思わぬ記憶がよみがえりました。何気なく観ていたテレビの医療番組で、呼吸器疾患の患者に希望のある前向きな治療方法を紹介していたドクターが、友人のご主人であることがわかったのです。そのドクターとの出会い

が導かれて、受診から七十歳で天に召されるまでの夫の闘病生活は平安と感謝に包まれました。病で苦しい谷を通る時があっても、夫の表情は平安でした。イエス様はいつも私たちの傍らにいて守ってくださいました。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。（詩篇　23・1～4）

老齢になって

夫がイエス様のみもとに召されてから二十二年の時が過ぎました。二〇二〇年の春頃よりコロナ感染の猛威が私たちの生活に濃い影を落とし、先が見通せない時代になりました。感染から身を守るため、しばらく吉祥寺の集会所が閉ざされた時は不安と寂しさがありましたが、まもなくインターネットを介して各々置かれた場所からみことばの語らいに加えていただく新しい方法が与えられました。私も集会の皆さんとの語らいの場につながれて、主の恵みのすばらしさをいっそう感謝する日々となりました。主は生きておられ、私たちの弱さの中に働かれて喜びを与えてくださいます。

私も高齢をむかえ、親しくお話をしてきた友や親族も同様に齢を重ねております。加齢による肉体の衰え、病の床につく方も多くなりました。お元気ではあっても、「人生はなんて儚いものなの」と嘆くようにくり返す老婦人の言葉に、私のこころは痛みます。主イエス様をお伝えしたいと願いつつ、それにふさわしい語らいの場が与えられるように日々祈っております。

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。

（ピリピ　2・13）

神澤 みな子（かみざわ みなこ）
一九三五年　富山県高岡市小馬出町生れ
富山県立高岡高等学校、北陸学院短期大学保育科卒

夫　正樹（まさき）（二〇〇〇年召天）
長男　裕一（ゆういち）、妻　智子（ともこ）、
孫　瞳（ひとみ）、望（のぞみ）、翼（つばさ）
長女　友子（ともこ）



イエス様との出会い

福井　満



奥様の幸美さんと

私は静岡県の島田市に住んでおり、現在、掛川キリスト集会に集っています。私は子どもの頃から「教会」に行っていましたが、主イエス様の十字架の死が、自分のためであることがわかったのは、今から二十六年ほど前のこと、平成六年の十一月の出来事でした。かなり前の事となります。先ずその前に、それに至った経緯を述べてみたいと思います。

子供の頃の私はいたって平凡、というより何か特徴のない、そして覇気のない目立たない少年でした。現在もあまり変わりはありませんが、ただただ私の願いは自分の家庭の平和でした。何気ない風景の笑いの絶えない一般の家庭に憧れていました。私の家庭は父母の諍いが絶えませんでした。母は父に対して秘密があり、それが決して外に漏れないようにしていました。そのために諍いが絶えなかったのです。長男である私は母の秘密を知っていましたが、間に立って、諍いにならないように口を閉ざしていました。家庭の平穏無事は私の肩に掛かっていました。子供の頃の私の記憶の中には、父母が仲良く話し合ったり、笑顔で会話したりといった姿がありません。それが原因だったのでしょうか、その頃から厭世的な考え方をしていました。

大好きな祖母が亡くなった時の事、かわいがってくれた祖母だったので大変落胆し、人はいずれ死ねばこの様に焼かれて僅かのお骨が残るのみ、それならば生きて苦労して散々嫌な思いをして何の良いことがあるのだろう。何をしても最後は死が待ち受けているだけで、人の一生とは何の価値があるのであろうと私の心は厭世的になっていくのみでありました。それに加え、両親の絶え間ない諍いのことでいつも苦しみがありました。

子供の頃は非常に心の歪んだ状態であったと言えます。それでありながらも、我が家は皆、教会へ行っておりました。中身はどうであろうと、外見的には平均的クリスチャン家庭であったと思います。しかし、生活してゆくことや生きることの厳しさの中で、信仰生活が地に着かない感じがしておりました。子供の頃の私にとって信仰とは、教会に規則正しく通うことでした。そこでは必然的に聖書の話が出て讃美歌も歌いますので、段々と信仰へと結びついてゆくのです。当時幼い私が願ったのは、平和で笑顔が溢れる落ち着いた家庭でした。このこと自体何も特別な事ではないと思います。しかし、子供の頃からこの様な事を考えていたのは、結局はこのような環境に私の家庭がなっておらず、逆の混乱のみがあったからでしょう。

私は昭和五十一年まで福岡におりました。その年の三月に東京に出ました。二十九歳でした。指圧師免状を五十三年に、柔整師免状を五十七年に手にしました。五十八年三月には小田原の教会にて幸美姉と結婚へ導かれました。東京の練馬から川崎市の多摩区へ、それ

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。（ペテロ　4・12、13）

何が正しく何が正しくないのか、かなりの見識のある方でも見誤ることがあると思います。

最も私を苦しめたのは、ある時、家内が突然、「教会」へ行かないと言い始めた時のことです。事なかれ主義で出来るだけ問題を起こしたく無いと思っていた私は、屋根の上から滑り落ち強度の全身打撲で動けなくなるほどの衝撃を受けました。「何かの聞き違いでは？」。しかし家内は教会には戻らないと言いました。

その後、父が家に遊びに来ていたときの事、礼拝に行くため車に乗って家を出ようとしたところ、車には

から平成元年に静岡県島田市六合へと引越しをしました。動機は山紫水明の地を渇望したことと、東京での通勤（痛勤）に疲れ果てたからでした。

我が家には三人の子供が与えられましたが、長男が登校拒否となり苦労をしました。当時は動転しており、天を仰いで嘆息するばかりでわが身を嘆きました。ニュースなどでも登校拒否の話題ばかりが目に付くように思いました。

この先どうなるかと懸念されましたが、主に祈り、長男に親の不手際を詫び、来るべき未来を信じ本人を信じて主に祈って毎日を過ごしました。するとある時から、決して笑わなかった長男の顔に笑顔が戻るようになり、状態が良くなって来つつあるのを確信することが出来ました。当時は必死でしたが主は助けて下さいました。主が私たちにこの事をあてがわれたのだと思います。

父と私だけが乗っていて、家内と子供たちは手を振って見送っておりました。父が私に「奥さんと子供達はどうするの？」と不安そうに聞いた時のことを未だに忘れる事が出来ません。車の中には重苦しい空気が流れていました。私の実家では、何があっても礼拝のための教会出席は欠かした事が無かったからです。私は何も答える事が出来ませんでした。僅か数秒の時間が私には永遠の時間の様に感じられました。私が怖れていたことが遂に起きました。家族での一緒の礼拝が破綻した瞬間でした。

この事をお聞きになられた方々は、多分、事の重大さを私の十分の一程にも感じられないことでしょう。しかし、私と実家の家族は生まれてこの方一日もたがわずに礼拝日を守って来たのです。この事を体験する以前も以後もです。これからも当然それは続くものと思っていたのです。どんな事があっても守って来たのに、父に苦しい経験をさせたことを悔やみました。「誰が悪いのか、誰が正しいのか？主なる神はどのように考えているのか？」。家族でそれまで通っていた「教会」に家内が行かなくなり、キリスト集会に通い始めたことは、この小さな家庭に大きな波紋を投げかけ、子供たちの間に大きな渦を巻き起こしました。そのため、家庭内バトルが起きたのでした。

かくして私が子供の頃から念じて止まなかった平和な家庭がここに見事に崩壊し始めたのであります。長男が登校拒否で苦しんだ事があったと書きましたが、このバトルの延長線上での事だったのです。子供は両親の不仲の下では精神的安定と健康が保てません。むしろ崩れていくのです。子供が言いたかったのは、友達の家の方がずっと気持ちが安らぐし、クリスチャンでは無いけれども我が家よりはずっと平和だということでした。

気が付けば私自身が原因となって、家庭内に不幸の種をまき散らしているのでした。

8人の証し

Unser HERR lebt

誰もが自分がやっている事が正しいと考えて歩んでいるのです。そうでなければ生きてゆく事すら難しいでしょう。私はクリスチャンでいる事を苦しく無意味に感じました。心からの信仰ではなく、形式的な辻褄合わせの信仰ならもう止めても良いのではないかと思い、そのため、身辺整理を始めました。

みことばの中にその答えを得ることができるならば、私はそれが一番だと考え、毎日聖書を開いて読み、祈ることが続きました。ある時は自分を是とし、ある時は否でした。理解が進むと言うより混乱の中に迷い込む様な感覚でした。少しも前進できず暗中模索、手探りの状態でした。仕事をしながら、夜疲れた状態で就寝前の僅かな時間に聖書に向かったとしても、膨大な資料の中から何が分かるのでしょう。だからといって手を緩めることは問題の解決にはならず、気持ちだけが焦っていました。

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの後で完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

（1ペテロ　5・10）

次々とやってくる困難苦難のため、仕事中も涙が出て仕方がありませんでした。暫くこの様な状態が続きましたが、平成六年十一月半ばころ、昼休みで家に戻った時の事でした。家内は外出中で私一人が家に居りました。部屋の中を歩いていると『子供をしつけることの意味』というタイトルのD・M・ロイドジョンズ師の小冊子を見付けて何気なく読んでみました。イギリス国教会牧師、宣教師でもある師は、神のみことばに基づいて子供を育てる事をその本の中で切々と説いており、家庭内で神の戒めが適切に用いられるならば祝福となるといった内容でした

子供たちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。

（エペソ　6・1～4）

長い間、この事の確証を得ようと苦心惨憺していたため、非常な心の喜びを感じ、報われた思いで胸が一杯になりました。正にその時でした。十字架が眼前に示されたのです。それまでの長いクリスチャン人生で、実は十字架とは無縁の私でした。十字架が分からなかったし、距離があったのです。しかし主は、私を困難の中に置く事によってご自身を示されました。度重なる辛い経験は主の方法だったのです。主は無理解で頑なな私を愛するため砕かれました。

私のような無価値で頑なでどうしようもない者のためにもイエス様は十字架に架かって下さった。「お前のためにイエス様は十字架に架けられた」とくり返し私に囁きかけ、心に響いてきたのです。その場で私は否定しました。私はイエス・キリストが尊い生命を投げ出すに値する者ではないし、イエス様が十字架に架かられたことは私からはどこか遠くの地でのできごとであって、まさか私のためなどという事があるだろうかと全く否定的でした。しかし自分のためにイエス様が亡くなられたのを否定することが出来なくなり、耳元で囁くその声は私の脳裏に焼き付き、私は過去のそれまでの自分を維持する事が出来ず、主の前に私の観念を放棄せざるを得ないと思いました。いきなり私のために十字架に架けられたイエス様が眼前に大きく示され、私は声をあげて泣きました。あまりの圧倒的喜びと主の愛そのものが私に示される説明し難い不思議な体験をし、イエス様がこの私のために十字架に架け

8人の証し

Unser HERR lebt

られ、私をこの上もなく愛して下さっている感覚を味わいました。その体験の最中は身体全体が気持ちいい温もりで包まれており、正にイエス様は私を愛して下さっていると思いました。イエス様は私に様々な方法でご自身を示されました。

どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいて下さいますように。また、愛に根差し、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれ程であるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。…　（エペソ　3・16～19）

イエス様の愛の、ものすごい質量の海の圧倒的なスケールの愛に包まれた体験をし、驚嘆しました。人知を遙かに超えたその愛をその長さ深さ広さ高さを通して、私にはっきりと分かるように示して下さいました。暫くして椅子に腰を下ろした時、興奮冷めやらず心の底から喜びで一杯でした。その後、時間が経過する中で心は落ち着き、凪の状態のように、幸せ感に包まれていました。生まれて初めての体験で、喜びが内にありその喜びを他の人に知ってもらいたい気持ちで一杯でした。福音書の中で、病を癒された者たちが皆にふれ回った様にです。

思えば、みことばに向かい合い、苦心惨憺したのは、イエス様に出会う準備をしていたのだと思います。取税人のザアカイの様にイエス様を求めたのです。真実なる方は、ご自身を求める者に出会うとおっしゃいました。イエス様を求めるという事は、狭い小さな門から入る事であります。人は例外なく広い門、広い道から入って行きます。しかし主は狭い門から入るように言われ、そこから入る者はいのちに至るとおっしゃいました。

狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。　（マタイ　7・13、14）

これからもイエス様は、愛する者を叱ったり懲らしめたりなさるでしょう。

わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。
（黙示録　3・19）

イエス様は優しい方であり真実に愛して下さり、あなたのためにご自身のいのちをさえ惜しまれない方です。この私の経験が少しでも悩み苦しむ人達の助けになればと思います。多くの方々の霊的歩みの一助にでもなれば幸甚であります。主に栄光が帰されますように。

家内と私が集会へと集い始めた時期は十年近くのへだたりがあります。家内が集会へ先に集い、私は十年ほどあとになって集い始めました。はじめは年に数回ほど御代田（西軽井沢国際福音センター）に行く程度で、地元の集会に出席することはありませんでした。

私の証しは「教会」へ集っているときに体験したものです。私の家族は現在、集会とともにあります。聖書に世界の各地から御旨にかなう人々が、人種、文化、集いの違いを乗り越えて神の国に招かれており、神の食卓に着くとあります。教えや集いの違いを乗り越えて、神の御心にかなう者だけが、その席に着くことになります。

私こそはと胸を張る者が知らないと拒絶され、私も

8人の証し

Unser HERR lebt

いいんだろうか?と伺う者が、席に招き入れられ、神の基準に合う者だけが、その席に着きます。私もその一人でありたいと思うのみです。

神は傷つけるが、それを包み、打ち砕くが、その手でいやしてくださるからだ。（ヨブ　5・18）

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル　12・11）

福井 満（ふくい みつる）
昭和二十一年十二月二十六日生れ　福岡市博多生まれ、博多育ち
昭和四十二年三月　福岡第一薬科大学付属福岡第一高等学校卒業、
昭和五十三年三月　日本指圧学校卒業、
昭和五十七年三月　日体大付属日体柔専卒業
昭和五十七年十二月　旭整骨院開設（東京練馬区）、
平成元年五月　静岡県島田市六合にて整骨院開設、
平成二十一年七月　デイサービス併設、
平成三十一年二月をもって事業所閉鎖今日に至る
妻　幸美（ゆきみ）
長男　純一（じゅんいち）、妻　三恵（みえ）、
幸一郎（こういちろう）、誠実（せいじ）、
恵（めぐみ）、晶（しょう）、愛（あい）、
心（こころ）
長女　香（かおり）
次男　恵太（けいた）

神は愛です

森下 待子



待子さん（右）の洗礼式に、神田啓子さんと

わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。（イザヤ　48・17）

生涯結婚しないで一人で自由に生きて行きたい、と思ったのは十歳の時でした。そのためには大学に行って専門性のある職業に就きたいと考えていましたが、我が家の経済状況では無理かもしれないと思っていました。

なかなか進路が決められず不安でなりませんでした。高校三年生の二学期に、僻地で働く医師のドキュメンタリー番組をテレビで観ました。「私も、こういう仕事がしたい」と思わず口にしました。それまで「女の子が何も大学に行かなくても」と言っていた母が、初めて進学に賛成してくれました。高校の担任に相談すると、「絶対無理」と言われました。一年間世間から隠れるよ

うにして自宅浪人をし、教科書だけを何度か復習して山口大学に合格しました。

そこで、後に私をイエス様に導いてくれた、神田啓子さんと同級生になりました。

卒業後、師事していた教授からようやく研究テーマをもらい、楽しく実験に明け暮れていた三十二歳の時、私の実家の近くにある市立の診療所が無医になったので戻って働いて欲しいという要請が、市からありました。二回お断りした後、「帰って欲しい。私たちも歳を取ったから」という電話が母からありました。貧しいなか大学に行かせてくれた母の懇願を断ることは出来ませんでした。研究への未練から、悔しくて一晩大泣きに泣いて、帰る決心をしました。

私が四十三歳の時、母が肺がんで亡くなり、父と二人の生活になりました。父は三年前に胃がんの手術を受けていましたが、その後軽い認知症を発症していました。私は、母を救えなかった分、父をしっかり介護するつもりでしたし、出来ると思っていました。しかし、すぐに「この状況から早く解放されたい」と思うようになってしまいました。三年後、父も亡くなりました。四十八歳で診療所を辞職しました。燃え尽きていました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

私の人生は失敗だったかもしれない、なぜ生まれて来てしまったのだろうかと、生きる目的も目標も無くし、無気力に日を送っていた五十歳の時、神田啓子さんに、「ドイツ喜びの集い」に誘われました。

一九九九年六月十一日、初めての福音集会で、イエス様と出会いました。神様が人間を愛してくださると聞いた時、涙があふれて止まらなくなりました。

六か月後、ベックさんの著書『絶えず祈れ』を読んでいて、悔い改めに導かれました。父に対して抱いていた気持ちを声に出して告白した時、聖書のみことば「しかし、私は虫けらです。人間ではありません」（詩篇22・6）が脳裏に浮かび、自分の恐ろしい正体を知って震えました。七日間、暗闇を歩いているようでした。八日目の早朝、なぜだか「赦された」という思いが与えられました。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ　1・9）

聖書に書かれていることは全て本当のことだと、この時から信じることが出来ました。

それから、思い出す限りの罪を悔い改めましたが、私には、「自分は何か正しくない」という思いがずっとあり、なぜだろう、なにが間違っているのだろうと考えてもどうしても分かりませんでした。「私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」（詩篇139・24）と祈っていました。

私の最も恐れたものが、私を襲い、私のおびえたものが、私の身にふりかかったからだ。（ヨブ　3・25）

二〇〇六年六月、私は自分で乳がんを見つけました。私はすぐ、治療はしない、動ける間は普通に生活し、耐えられなくなったらホスピスに入ると決めました。一人で闘病はできないと思っていましたし、そのような状況になることを最も恐れていました。また、アサ王が病気になった時、主を求めず医者を求めたというみことばにも囚われていました。不思議なことに一年半近く乳がんのことは忘れていました。

二〇〇七年十二月頃から「あなたの家を整理せよ。あ

8人の証し

Unser HERR lebt

なたは死ぬ。」（2列王記20・1）のみことばが、頭から離れなくなりました。そして、乳がんが少し気になりだしました。

二〇〇八年二月の初め、一つの話を人づてに聞きました。良性の脳腫瘍で何度か手術している姉妹が、主治医から「もう一度手術をしましょう」と言われた時、「もうしません」と断った事に対して、ベックさんが、「自分で決めるのは傲慢でしょう」と言われたというのです。それを聞いて私は非常に動揺しました。

十日後、「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。」（2テモテ1・7）というみことばが目に留まりました。私が乳がんの治療を避けていたのは、アサ王のエピソードのせいではなく、ただ臆病で現実を直視することが出来なかったためだと気付かされました。私は、愚かで傲慢でした。そして、主のみこころは、私が勇気を出して、治療を受けることだと分かりました。すぐ病院に行きました。

すでに腋窩リンパ節に転移があり、術後、抗がん剤の治療が始まりました。自己管理には自信がありましたが、三回目の抗がん剤治療の時、薬の副作用で認知症気味になり、副作用止めの内服薬を飲み忘れ、あっと気が付いた時には、高熱と呼吸困難と下痢で、動けなくなっていました。頭の中が真っ白になり、祈ることも出来なくなった時、主は、幻で、私が救われてからの九年間の、主と私の関係を見せてくださいました。私はその時まで一度も主に頼ったことがありませんでした。何事も自分で考え、計画を立て、判断し、一人でやり遂げようとしていました。誰にも支配されず、頼らず、一人で生きていることが私の誇りでした。無意識のうちに主の干渉を拒み、私自身を神にしていました。

この民は口先で近づき、くちびるでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。

（イザヤ　29・13）

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

（ガラテヤ　6・14）

虫の息の状態で、言葉にすることも、声を出すこともできませんでしたが、悔い改めて、初めて、「助けてください」と主にすがりました。それまで悪寒でがたがた震えていた体がほかっと温かくなり、その後、深い眠りに落ちました。目が覚めた時には熱は下がり、呼吸も楽になっていました。

私は一人で闘病しなければならないと思っていました。しかし、主が私と共にいてくださり、主ご自身が看病してくださいました。

私の神、主よ。私があなたに叫び求めると、あなたは私を、いやされました。主よ。あなたは私のたましいをよみから引き上げ、私が穴に下って行かないように、私を生かしておかれました。

（詩篇　30・2、3）

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。

（ヨブ　42・5）

この時から、イエス様は私の中で、「私の主。私の神」になられ、ようやく聖書のみことばが、心に入って来るようになりました。

主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。

（ヘブル　12・6、7）

8人の証し

Unser HERR lebt

二〇一〇年九月から、私の周辺でいろいろな問題が起き、集会の兄弟姉妹と一致がなくなりました。「なぜ私がこんな役割をさせられなければならなかったのか」と、毎日つぶやいていました。集会に集うことが苦痛になりました。しかし主は、私が集会の礼拝を欠席することも、集会から離れることもお許しになりませんでした。むしろ、兄弟姉妹を通して、私自身がどのような者かということを教えてくださいました。

私は、「自分が正しかったか否か」にこだわっていました。しかし主は、人の正義ではなく、主の義を第一にしているかどうか、私の心の有り様を問われました。

私は自分が、「みじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者である」(黙示3・17)ことを知りました。そして、他者への愛の少しも無い、自己愛の塊だという事実を突きつけられました。主から、兄弟姉妹のために祈るようにと促されていることが分かっていても祈れませんでした。長い間、自分で自分を愛ある人間に変えようと、空しい努力をしていました。

二〇一六年十二月、集会の一人の姉妹が言われた、「私は、みことばに立ちます」という言葉に思いを巡らせていた時突然、私の自己愛は、主と共に十字架にかかって、すでに死んでいることが分かりました。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのはなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。(ガラテヤ　2・20)

ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。(ローマ　8・12、13)

内住の御霊様をないがしろにし、自己主張ばかりして来た不信仰を、悔い改めました。

自己愛は、相変わらず私の中にありますが、これまでのように自己愛に振り回されて、罪悪感に苦しむことが減りました。

九年間の訓練は、私を砕き、へりくだって御霊様に従って生きるようにとの、主の愛と憐れみによるお導きだったと分かりました。

それまで彷徨っていた霧の中から、ようやく光の中に出て来ることができました。そして、長い間持っていた、「私は何か正しくない」という思いが無くなっていることに気がつきました。

再び、集会に集う喜びが戻ってきました。兄弟姉妹の中に居させてもらえることに深く感謝しました。

あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ　8・32)

8人の証し

Unser HERR lebt

子供の頃、私は物理的な、だれからも束縛されない、放縦な自由を望んでいましたが、主は、そのような罪の自由から私を守ってくださり、私自身の頑なな魂から自由にしてくださり、解放してくださいました。

新型コロナ感染症による孤立死が、度々報道された二〇二〇年六月に、ある所から、いくつかの介護付き有料老人ホームを紹介されました。私は一人暮らしですので、いつかは老人ホームに入るつもりでしたが、まだまだ先のことと思っていました。

九月の初め、集会に旧くから集っておられる姉妹が書かれた証しの本、『輝いたあの人たち』を読みました。読みながら、私も何のために生まれて来たのだろうと、ずっと考えていました。その時、次のみことばが与えられ、私は初めて、自分が生まれて来たことを肯定的に捉えることが出来ました。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」（イザヤ　43・1）

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

私がこの世に生まれた意味は、これが全てでした。

私は、生まれたからには、何かの意味や価値が必要と思い、具体的なものを求めていました。しかし神様にとっては、私のこの世での職業も業績も地位も、何一つ意味も価値も無いのだと分かりました。主が、私の名を呼んでくださった時、私は「はい」と答え、主の御前に行きました。私が、この世でなすべき必要なことはそれだけで十分でした。ただそれだけで、罪を犯すばかりで何も出来ない私を、主は、この世から救い出してくださり、罪を赦してくださり、永遠のいのちを与えてくださったのです。

天では、あなたのほかに、だれを持つことができましょう。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。

（詩篇　73・25）

イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（マタイ　16・24）

私も、このように主だけを望み、このようにして主について行きたいと強く思いました。

十月に、再び老人ホーム入居を勧められました。もはや、どこで、どのように生かされても良いと思いながら、「主よ。あなたの決めておられるように、私を生かしてください。」（詩篇119・149）と祈りました。

胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

（イザヤ　46・3～4）

主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。

（申命記　31・8）

七日後、これらのみことばをいただくとともに猛烈に熊本の老人ホームに入りたくなりました。

入居の手続き、家財の整理、引っ越し準備と、一人で一生懸命頑張りました。次々に難問が持ち上がりました。やはりこのことは、主のみこころではないのかとあきらめかける度に、主は、直ちに助け手を送ってくださいました。何度もそういうことがあって、ようやく、このことが主から出ていると確信できました。その後は全て主におゆだねしました。たちまち事はスムーズに進みだし、まるで鷲の翼に乗せられて運ばれるように二〇二〇年十二月二十三日、老人ホームに無事入居できました。一度も見学しないで入居した終の棲家は、何一つ不足不満の無い、最善の所でした。

主は遠くから、私に現われた。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」

（エレミヤ　31・3）

神は愛です。

（1ヨハネ　4・16）

8人の証し

Unser HERR lebt

森下 待子（もりした まちこ）
一九四八年、岡山県加賀郡賀陽町生まれ
新見市立井倉小、中学校、岡山県立新見高校、
山口大学医学部卒
国立療養所山陽荘、山口大学医学部付属臨床検査技師
学校専任講師、新見市井倉診療所



聖書と主イエスをまだご存じない方々へ

小林 昌史



ご家族と（前列一番左が昌史さん）

死は終わりではない

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒 16・31）

――私の母親は主イエス（イエス・キリスト）のことを知らずに五十九歳の若さで亡くなった。私が主イエスを信じるだいぶ前のことだった。こういう場合、母親はどうなるのだろうか…。

私のこの疑問に、私が集うキリスト集会の尊敬する方がこう教えてくださいました。

「あなたが天国に行った時、お母さんがいなければ、そこは天国ではないよ」。

あなたが天国に行ってお母さんに再会できないとしたら何と悲しいことだろう、そんな所は天国とは呼べない、天国にそんな悲しみがあるはずがない、あなたは天国でお母さんに再会できる、だから感謝すべきだ

よ。その方が教えてくださったのは「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」、という聖書の約束を信じるようにということだったのかも知れません。

その時はそういうものだと理解でき喜びました。しかし天国で母に再会できることを本当に楽しみに思うようになったのは、自分の年齢が六十代後半となった最近です。

一方、父は七十三歳の時に主イエスへの信仰を告白するに至りました。やはり私がキリスト者になる前のことです。私の弟がアルコール依存症となり、キリスト集会に集っていた義母から同集会のアルコール依存症経験者の方を紹介してもらったのがきっかけでした。父は信仰について私に話すことなく三年後に亡くなりました。後年、義母がその経験者の方より聞いたこととして私に話してくれたのは、父がキリスト者になったということでした。多少半信半疑でしたが、数年ほど前、父が自分の信仰を書き綴った証しが見つかりました。最後はこう締めくくられています。「…神は私のようなものまで見守っていてくれたのです。うれしいです。見守るだけでなくシグナルを送ってくれたのです。心強いことです。絶望するな。私には神がついているという確信をもっています」。

父が信仰を持ったことは私の喜びです。天国で父に再会できることが楽しみになりました。

人間誰でもいつかは死にます。そして私くらいの年齢になると、自分の死はまだ見えないはるか先の彼方にあるものではなくなってきます。今の私にとって、愛する両親と天国で再会できる望み、弟も二〇〇四年に急逝しましたので、愛する両親、弟と天国で再会できる望みがあることは、日々の生活の中でひとつの喜びになっています。

死ですべてが終わるわけではありません。これは聖書が言っているとても大切なことです。

死ですべてが本当に終わるのでしょうか。そうであれば、人生とはあまりにも短く悲しいものではないでしょうか。人類の長い歴史の中でたかだか八十年と少し、いやもっと短いかもしれません。そのわずかな間に愛する両親をはじめとする家族との別れ、恩師や親友との別れがあるのですから。しかし死は終わりではない。永遠の世界がある。そこは神である主イエス(イエス・キリスト)とともに住む世界、愛する人達とともに住む世界、もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない世界。そういう世界があると聖書は明言しています。聖書に約束されていることは百パーセント実現します。ですからこの素晴らしい世界へやがて行けることこそが、私の人生の最大の希望です。

聖書、主イエスとの出会い

私は歯科関係のメーカーに勤める会社員です。二〇一四年秋に定年を迎え、再雇用という形で現在は週に三日働いています。家族は妻、長女、長男、次女の五人家族。長女長男は既婚、次女は二〇二三年春に結婚予定、現在は妻と次女との三人暮らしです。

私が主イエスを信じ受け入れたのは二〇〇五年の夏、ちょうど五十歳の時でした。前年の四月からグループ子会社に出向となり、慣れない経理・財務のマネージャーとして、平日はよく会社に泊まり込み、夜中の零時まで、時には三時まで仕事をし、休日も週一日は出社するという日々を送っておりました。出向して一年半ほど経った頃、経理・財務に加えさらに人事の大きな仕事を任されることが決まり、自分にはもう無理だという思いと恐れが生じ、やがて会社に行けなくなりました。その後、精神科のクリニックに行き、うつ病と診断され、二か月ほど休職となりました。

この休職中の夏に、かねて興味を持っていた調布市のある教会に行き、そこで主イエスを信じ受け入れま

8人の証し

Unser HERR lebt

した。実はグループ子会社に出向してまだ間もない頃、親会社でお世話になっていた上司に慣れない仕事環境の悩みを相談した折、彼から聖書に関する一冊の本をプレゼントされました。彼がキリスト者であることを初めて知りました。本を読んで感動しました。しばらくの期間は毎夜何度も読み返しては、時に涙したことが思い出されます。そしてこの本の著者が、この調布市の教会の牧師だったのです。

本の中で一番心に染みた記述を少し紹介します。

「あなたは最高の作品としてつくられた」「バイブルは、あなたを至高なる芸術家の『ポエム（詩）』だと言う。神は『あなたの人生』という『ポエム』を通して、自分という存在を表現したいと願っている」「私たちはみな、上から与えられるビジョンに溶け込んで生きるための『最高な位置』に落ち着くまで、失敗や挫折をくり返す。それらの体験こそが、知らず知らずのうちにあなたの軌道を修正し、あなたの持てる力と可能性が最も有効に活用されるための場所に、あなたを導く道しるべとなるのだ」

うつ病と診断され、休職となり、部下へ電話で引継ぎ連絡をすることさえ恐れのため苦痛だった当時の私にとって、この牧師のいる教会へ直行するのにさほど時間はかかりませんでした。初めて行ったその日の日曜礼拝の後、案内をしてくれた男性に、自分は主イエスを信じると言いました。ごく自然な気持ちでした。やがてこの教会で洗礼も受けました。

私は若い頃、どちらかといえば人間を超越した存在を信じるようなところがありました。やがて結婚し、妻がいくつかの教会に時々子供達を連れて行くのに同行したり、やはり妻が、聖書の理念を大切にする東久留米市の自由学園に子供達を入学させたりするうち、四十代半ばを過ぎた頃から漠然と神の存在を考えるようになりました。聖書は全く読んだことがありませんでしたが、そんな私を主イエスはこの時捉えてくださったのだと思います。

主は生きておられる

主イエスを信じ受け入れてから十数年以上が経ちました。教会は二つ変わり、現在は義理の両親（故人）が集っていたキリスト集会（武蔵野市吉祥寺）に集っています。

キリスト者になってすべてが順風満帆だったわけではありません。また聖書と主イエスを信じる者として百点満点の信仰生活を送ってきたわけでもありません。ただ自分の悩みや願いは何でも主イエスに打ち明け相談することだけは続けてきました。また主イエスが十字架上で代わりに負ってくださった自分の罪と自分は赦されたという事実をみつめ、主イエスに感謝することが近年多くなりました。

そんな私に対して、主イエスはいつも寄り添ってくださり、実際に何事かを成してくださいます。このことをよく聖書では「主は生きておられる」と表現します。今お読みくださっているこの冊子のタイトルでもあります。「主は生きておられる」、キリスト者なら誰でも日々の生活の中で実感することです。私の実例を少しご紹介します。

(1)義弟のこと

義弟は三十年のひきこもりの後、二〇一四年から海外（フィリピン）で仕事をするようになりました。仕事がある程度軌道に乗り始めてからは、それまでずっと独身でしたが結婚を考えるようになりました。そのことを知り、私は何年か前から彼の結婚や仕事のことを主イエスに祈っておりましたが、二〇二一年から結婚に向けての進展も見られるようになりました。それに伴い仕事も変わりつつあります。また彼は機会があれば洗礼を受けたいと考えるようになりました。義弟のことを誰よりも心配し、また彼がキリスト者になることを願い祈っていたのは亡き義母です。こうして主イ

エスは祈りに応えてくださいました。今後の展開は予想がつきませんが、祈り続けていきたいと思います。

(2)今描いている絵のこと

私はある絵を十年近く描き続けています。仕事でストレスを抱えた時に気分転換の目的で始めました。鉛筆画で次女が歯みがきをしている絵です。私の会社が歯科関係のメーカーなので描き上げたら販売部門に販促ツールのひとつとして提案しようという軽い気持ちでした。絵を描くことは昔から好きでした。ところがいざ始めるとなかなか思うように進みません。いつも四苦八苦しながら描いています。しかし絵が上手く描けた時は本当に嬉しく、その日を前向きな気持ちで過ごすことができます。そしていつの間にか、この絵を描き上げることに主イエスの後押しを感じるようになりました。十年は確かに長かったですが、間もなく完成するでしょう。その時を楽しみにしています。

(3)エトセトラ

禁煙が成功しました。それまで何度か失敗の経験があったので、主イエスが望んでおられるなら成功するだろうと、敢えて結果を気にせず始めたところ、不思議なほど楽に禁煙できました。また、今まで経験したことのない腰痛に悩み主イエスに祈る中、内臓検査の必要性を感じ、良いかかりつけ医としてのクリニックを近所で見つけることができました。検査結果に異常はありませんでしたが、このことをきっかけに健康のため運動をするようにもなりました。どちらも比較的最近のことです。最近といえば、自宅のパソコンを新しくしたことでこの「証し」の原稿作成がスムーズにでき大変助かりました。これは、新型コロナ緊急事態宣言が解除された時に我が家に来れるようになった長女の夫が新パソコンの設定をしてくれたおかげです。今思うと不思議なタイミングでした。主イエスの成せる業でしょう。このようなことは日々の生活の中で山ほどあります。

聖書と主イエスをご存じない方は、私の実例はたまたま偶然に起きたことと思われるかもしれません。しかし聖書によれば偶然はあり得ません。原因があって結果があります。そうでないと、私達が生まれたことも、今どういう生き方をしているかも、偶然の産物になってしまいます。聖書と主イエスをご存じない方はあるいはこう思われるかもしれません。私の実例は確かに何かしらの原因がありその結果として起きたことだが、主イエスとは無関係だと。しかし、History（歴史）がHis Story（「彼」＝「主イエス」の物語）とも言われるように、すべての結果は主イエスに起因するというのが聖書の考え方です。ある結果をもたらす原因も、その原因と認められることがそもそも何故生じたのかと考えてゆけば終わりがありません。そしてそこに主イエスの関与を認めるしかなくなります。

主は生きておられます。このことを日々の生活の中で実感できることは大きな励ましであり喜びです。

8人の証し

目的地をめざして

最初にお話ししましたが、六十代後半の自分にとって、愛する両親、弟と天国で再会できる望みがあることは、日々の生活の中でひとつの喜びになっています。またこれもお話ししましたが、死ですべてが終わるのではなく、永遠の世界、神である主イエスとともに住む世界、愛する人達とともに住む世界、もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない世界が存在します。聖書が示すこの素晴らしい世界こそが、私達キリスト者がめざす目的地です。

聖書は分厚い書物ですが、この素晴らしい世界の光景を具体的に詳細に描写している箇所は実はほんの僅かです。恐らく人間の理解を超えた世界だからでしょう。聖書では「永遠のいのち」ということばがよく使われますが、永遠…すなわち無限の時間というものは、よくよく考えれば人間にはわかりにくいものです。

それでもキリスト者達は思いを巡らせます。各人各

様かもしれません。私にとって、めざす目的地の光景は、神である主イエスとともに、実に多くの人々で賑わっています。まず家族がいます。親戚がいます。友人知人も、会社の上司・先輩・同僚・後輩も、ご近所の人達もいます。聖書に次の約束があるからです。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

ここで言う「家族」とは、この約束が聖書に書かれた当時、血のつながりのある家族、親戚だけではなく、友人や知人も含まれました。またここで言う「救われる」とは、永遠の世界、神である主イエスのおられる世界の住人となることを意味します。この聖書の約束があるので、めざす目的地では私が考えている以上の喜びが待っていることを信じています。

めざす目的地には、私達キリスト者の家族、親戚、友人知人など実に多くの人達がいることを信じています。そしてもちろんすべてのキリスト者達、主なる神を信じた人達がいることは言うまでもありません。新約聖書に登場するペテロ、ヨハネ、パウロがいます。旧約聖書に登場するアブラハム、モーセ、ダビデが、エリヤをはじめとする預言者の人達がいます。さらに聖書に名前の記されていない、二十一世紀の今日に至るまでの数え切れないほど多くのキリスト者達、主なる神を信じた人達がいます。そして主イエスがおられる…これが私のめざす目的地の光景です。

目的地が素晴らしければ、目的地に至るまでの道のりが険しくとも、目的地をめざし歩み続けることができます。聖書に次のように記されているからです。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ　8・18）

今の時の軽い患難（かんなん）は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。（2コリント　4・17）

死ですべてが終わるのではありません。聖書が示す素晴らしい世界、目的地があるのです。

聖書と主イエスをまだご存じない方々へ

ここまで私の証しをお読みくださりありがとうございます。お読みくださったお一人お一人に、聖書と主イエスを知って頂く機会が今後訪れますことをお祈り致します。最後に、私達のキリスト集会で愛されているひとつの「祈り」をご紹介して、この証しを終わります。

愛する主イエス様
私のわがままのために、代わりに罰せられ死なれたことを感謝いたします。
あなたの流された血によって、すべてのあやまちが赦され忘れられていることも感謝いたします。
あなたを信じますから、死んでからさばかれることがないことも感謝いたします。
あなたを信ずる者は、死んでも生きると約束されていることも感謝いたします。
死ぬことは終わりではありません。あなたと一緒になることです。
私の国籍は天にありますから感謝いたします。
今からのことすべて、
あなたにおまかせいたします。
あなたの御名によってお祈りいたします。
アーメン。

小林 昌史（こばやし まさし）
一九五四年十月　東京都千代田区生まれ
千代田区立番町小学校卒、練馬区立石神井西中学校卒、
都立井草高等学校卒、学習院大学経済学部卒
株式会社ジーシー人事部勤務

妻　陽子（ようこ）
長女家族、長男家族、次女、義弟



神の意に添わないものなのに

加藤 宏美



ご主人の龍四郎さんと

私は一九五六年、沖縄県那覇市で三人兄弟の長女として生まれました。生家は本家で仏壇があり、祖母は熱心な祖先崇拝者で「ユタ（霊媒師）」にお願いして家が栄えるように家族の幸せのために沢山のお金を使って拝んでもらっていました。沖縄には米軍基地の関係で教会も沢山ありますが、沖縄の人は先祖を大切に思う気持ちが強いため、偶像礼拝が熱心に行われています。

むなしい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨てます。
（ヨナ　2・8）

私の父は長男で小さい時から優遇され、甘やかされて育ったようです。そのせいか、若い頃から素行が悪く、お酒やギャンブルにのめり込んでいったようです。母は、父がそういう人とは知らずに若くして結婚したそうです。両親は大阪に仕事を求め、友人家族と先に弟だけを連れて行き、私は後から小学校四年生になっ

て行きました。その頃の沖縄は、アメリカの統治下、環境も習慣も全く違う所で育った私は大阪の生活になじめず淋しい思いをしました。

それに家では両親の争いが耐えず、優しい祖母もいなくて心は冷えきっていました。唯一、親友が与えられた事が慰めで、いつも一緒に過ごしていました。

さて、私とイエス様との出会いは中学の時でした。その頃、バレーボールがとても盛んで運動が苦手だった私がなぜかやってみようという気になり、親友と入部しました。部員がとても多く、レギュラーにはなれない事は分かっていましたが、少しでも上にあがろうと二人で時間があれば空地で練習していました。そんな中学二年生の九月の祝日に、クラブの仲間十人位はいたと思いますが、ワイワイと皆である教会に集いました。生まれて初めて行った教会、友人達と一緒だった事もあり違和感は全くなくただ楽しかったのを覚えています。何より教会の方の優しい輝いたお顔に惹かれました。私は、直ぐに何のためらいもなくイエス様を救い主として信じました。十四歳の時です。親友や友人達は、次々と離れていきましたが、私は、集い続けていました。イエス様に出会った喜びは忘れることができません。状況は変わらなくてもいつもイエス様が側にいて助けてくださり愛してくださっていると思うと、嬉しくて嬉しくて喜びで一杯でした。孤独だった私に神様は目を留めてくださったのです。

父の仕事は建設業でかなりの収入はあったと思いますが、放蕩はやまず給料はギャンブルにつぎ込み我が家は経済的に困窮し、母が正社員として必死に働いて家計を支えていました。私が中学三年生になる前、家庭の事情のため家族で沖縄に帰りました。暫くして母は私達を祖母に託して家を出て行きました。私が高校二年生の時、離婚が成立しました。私や妹は時々母に会っていたので淋しさはなかったのですが、繊細だった弟は荒れていきました。イエス様への喜びも段々と薄れていき、父の事を祈っても状況は悪くなるばかりで悩みを誰にも話せず、教会には通っていましたが「イエス様はどうして祈りを聞いてくださらないのだろう？愛されていないのでは？」とイエス様に不信をもつようになっていました。

沖縄の高校を卒業し、進学のため一人で再び大阪に行きました。十四歳のときに救われた教会は遠かったので、近くのメノナイト・ブラザレン教会を紹介されました。

心に平安は無く、悶々としていましたが、なぜか教会から離れることは出来ませんでした。神様を恐れる思いが少しあったのだと思います。その教会で主人と出会い、主人が二十五歳、私は二十三歳の時に結婚しました。

主人は父とは正反対で真面目な人です。二人の娘にも恵まれました。結婚生活は優しく大人しい主人をいい事にわがまま放題、良い子で過ごしてきた私は自分の本心を見せられ、我ながら呆れ返っていました。二人の娘にも自分の思いを押しつけるひどい母親であり妻でした。クリスチャンとは名ばかりで神様を悲しませる者でした。父は、私が結婚してからも度々、困った時だけお金を貸して欲しいと電話があり、情けなくて声を聞くだけでも鳥肌が立ち、嫌いでした。私だけでなく実の兄弟、親戚にも迷惑をかけていたので、父さえいなければ皆が幸せになれると許せない思いで一杯でした。

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。（エペソ　6・1～3）

8人の証し

Unser HERR lebt

神様の大いなるみわざをお話しします。

家族で教会に行き、奉仕も熱心にしていましたが、相変わらず心に平安は無くむなしい毎日を送っていたある日のこと、一九九一年頃の九月に行われたキリスト集会の「神戸喜びの集い」に知人に誘われ参加しました。ドイツ人宣教師のベックさんとお話しする機会が与えられました。ベックさんは、「苦しみが与えられるのは、神様があなたを愛しているから」と話され本当に驚きました。心の目が一瞬に開かれました。それまで私は神様の「杖」だけが愛だと思い込んでいて、「ムチ(懲らしめ)」が愛であるとは知らなかったのです。この世の宗教と同じでこの信仰をご利益的に考えていました。愛されていたからこそ沢山の苦しみを通されてきたとはっきり分かりました。その時、父への憎しみは一瞬に消え、許せるように変えられていました。奇跡が私の心の中で起こされました。許すために私は何一つ努力をしていません。一方的にイエス様がなさった事です。

イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」（ルカ　18・27）

私はイエス様に長い間誤解していたことをお詫びし、父を尊敬していなかったことを直接謝りました。父は黙っていました。

私が父に謝ってから父との関係が変わりました。私には心を開くようになり今までの事を話してくれました。ギャンブルは魔物で家族を愛していたけれどどうしても止められなかったと。後にギャンブル依存症という病気だと知りました。父は沖縄での礼拝や「喜びの集い」などに一緒に参加して沢山の集会の皆さんに受け入れてもらって声をかけて頂き嬉しそうでした。重荷を少しずつ下ろしているように見えました。確かに父の事では周りも随分振り回され恥をかいてきましたが、父自身が一番傷ついていたと思います。時々、自分のような者は天国へは行けないと話していました。そんな父に、「どんな人でもイエス様を信じ、わがままだったことを認めてごめんなさいをすれば天国へ行けるのよ」と伝えていました。

私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず、私たちの咎にしたがって私たちに報いることもない。天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。（詩篇　103・10、11）

そんな父は、七十四歳位の時にがんが見つかり、一週間位の短い入院であっという間に召されました。お酒、タバコなどで身体はボロボロだったと思います。最後は、母に許され、実の兄弟たちに許され、イエス様に赦されて天国へ旅立ちました。

葬儀は、本家の長男にもかかわらず聖書に基づき沖縄キリスト集会で執り行なって頂きました。沢山の親戚の方々が来てくださり、イエス様の真実と素晴らしさをお伝えする場となりとても感謝でした。

母のこと

父との結婚生活では、母は働き詰めで、身心共に心安まる日は無かったと思います。離婚して数年経った頃、母は再婚しました。継父は苦労人で気難しい所もありましたが、愛情深い人でした。二人の間に子どもがいなかったせいか、私や妹、その子ども達、特に妹の子ども達を自分の孫のように世話をし、可愛いがっていました。母は孫達と過ごすのが何よりの楽しみで幸せそうでした。イエス様が、苦労の多かった母に穏やかな晩年を過ごさせてくださり感謝しています。

母は七十八歳の時、急に食欲がなくなり病院で検査してもらったら肝臓がんの末期でした。医者は本人に告知し余命数か月だと正直に話してくれました。

母はとても健康な人でしたので、周りは大変驚きましたが、何よりも本人が一番驚いた様子でした。沖縄の人は、長寿がモットーで病気は災いでバチが当たったような捉え方をされた様で、母から病気の事は誰にも他言しないようにと強く口止めされていました。母は、時々沖縄の礼拝や「喜びの集い」に誘うと来てくれていましたが、がんと知ってからは自らの意志で集会に行きたいと言うようになり、妹の車に乗せてもらって三人で礼拝に集いました。その後入院になり、大学病院でしたがまるでホスピスにいるような扱いを受けました。末期がんのケアをする専門の看護士さんがおられ、身心共にケアをしてくださいました。

私や妹にもいっさい弱音を吐かなかったのに、その方には、心を開いて何でも話していたようです。悩みを聞いていただいて随分慰められたことでしょう。また、側に若いナース（クリスチャン）の方を置いてくださり、その方の担当が多く心温まるお世話をして頂きました。イエス様の数々の計らいに感謝しています。

母がいよいよという時、継父が察して兄弟、甥、姪に連絡してくれました。親戚は大変驚いて遠くから近くからすぐに駆けつけてくれました。本人も死を覚悟していたようで、お見舞いを喜んでいました。親族とお別れの時が与えられました。母の口から信仰告白は聞いていませんが、自らの意志で礼拝に行きたいと言ってくれたので充分でした。私には必ず母と天国で再会出来る確信があります。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

葬儀は、継父の意向で仏式、家族葬でしたが、母の人柄が現わされ、沢山の兄弟、甥、姪が来てくださり恵みの時でした。小さい時に遊んだ従兄弟達とも久しぶりに再会し、嬉しかったです。

母の召天後、継父は、母の分まで長生きすると前向きに頑張っていましたが、腎臓透析に加え年相応に心臓も悪くなっていて、母が召天した四年後の夏に突然倒れて天に召されました。

あまりの急な出来事でしたが、神様の時だと心は平安でした。継父からは私も妹も実の父親以上の事を沢山してもらいました。継父にも出会えた事を幸せに思っています。

わたしたちに反対しない者は、わたしたちの味方です。あなたがたがキリストの弟子だからというので、あなたがたに水一杯でも飲ませてくれる人は、決して報いを失うことはありません。これは確かなことです。

（マルコ　9・40、41）

天国での再会を楽しみにしています。

8人の証し

Unser HERR lebt

主人の病

主人は、二〇〇九年に五十四歳の若さでパーキンソン病を発症しました。現在六十八歳になります。介護支援専門員ケアマネージャーの仕事をしていて、パーキンソン病の利用者さんも何人か担当していました。まさか自分が同じ病気になるとは思ってもいなかったそうです。

パーキンソン病に加え脊柱管狭窄症、座骨神経痛など痛みとの戦いで不自由で辛い生活をしています。どうしてこの病気になったのか、考えてもわかりませんが神様は真実なお方ですから、意味があって私たちの益のために病を与えられた事だけはわかります。私は、主人の痛み、苦しみを理解することは出来ません。でもイエス様が主人を慰め励ましてくださっています。信仰の友の祈りにも助けられています。

私は心を尽くして主に感謝します。あなたの奇しい

わざを余すことなく語り告げます。私は、あなたを喜び、誇ります。いと高き方よ。あなたの御名をほめ歌います。（詩篇　9・1、2）

十四歳でイエス様と出会って、今日まで長い長い信仰生活を送ってきました。私のような不従順でわがままな、みこころに添わないものをも見放さないで忍耐し続けてくださった神様に深く感謝しています。

嬉しい事だけでなく、悲しい苦しい事もすべて神さまからのものと思える信仰を頂けた事、全てを恵みにしてくださる神さまをほめたたえます。

加藤 宏美（かとう ひろみ）
一九五六年　沖縄県那覇市生まれ
大阪府八尾市立南山本小学校、沖縄県立上ノ山中学校、沖縄県立那覇商業高等学校卒、キリスト教保育専門学院卒
夫　加藤 龍四郎（りゅうしろう）
長女　しのぶ
次女　愛



左から、奥様の麻起子さん、宗男さん、長女の愛実さん

わたしはあなたとともにいる

成田 宗男

私は一九六二年二月八日に名古屋で表具師であった父鎮男と母美代子の長男として生まれました。両親は表具師として主として襖・障子の張替えで生計を立てていました。

私は、子供の頃から内向的性質が強く、引っ込み思案で、寡黙で、家でも学校でもほとんど人と会話することなく、世の中のことや自分のまわりで起こっていることにも無関心で、ただ自分の心を見つめているだけで喜びも生きがいもない無気力な少年時代を送っていました。一体自分は何のために生きているのかという疑問が心の中をいきめぐっていたように思います。

そのような私はひとり息子なのですが、かつて司法試験を目指し、中央大学法学部夜間部に入学し、八王子で下宿していた時期がありました。そして大学入学して間もない時期に運命的な出会いがありました。それはキリスト教の異端とされている統一教会との出会いでした。

霊感商法や合同結婚式で有名な統一教会の学生組織である原理研究会の熱心な女性信者からの勧誘を受け、アットホームな雰囲気の中で、真剣に真理を求める若者たちの姿に心打たれ、私もいつの間にか信者になり、授業の合間や授業が終ってからキャンパス内や駅の近くで路傍伝道をするようになっていました。そればかりか下宿を空けて統一教会の信者同士で共同生活するホームと呼ばれるところで寝食を共にするようになっていました。

いくら下宿に電話しても連絡を取ることができず、不審に思った私の母が突然名古屋から上京してきたのですが、下宿には生活している気配もなく、心配のあまり大学の学生課に相談し、呼び出してもらい、対面することになりました。いつの間にかひとり息子が統一教会の信者になっていることを知った母は、かなりの憤りと悲しみと情けなさを感じたことと思います。

当時の自分の心を振り返ると、「親の反対に屈することは親のためにも、先祖の救いにもならない。どんなに反対されても地上天国実現のためにがんばることが親や先祖の救いにつながるのだ」と信じていたように思います。「神の為に生きる宗教」の特徴とは、いろいろな条件をつけて、とにかく神の国実現のためにがんばることを要求するものにほかなりません。また「神の為に生きる宗教」は、地上天国実現という大きな目的のためなら親に嘘をついたり、先祖の救いのためだと言って信者のみならず、一般の人に高額な物品を売りつけることも小さなこととして正当化されてしまいます。そういった考え方が世間を騒がせた霊感商法へとつながっていったのだと思います。「親の心、子知らず」ということわざがありますが、正直申し上げて「神の為」といいながら、神の御心を知らない、的外れな宗教になっているように思います。

ここから「神の為に生きる宗教」から「主なる神と共に歩む信仰」への導きについて触れていこうと思います。紆余曲折がありましたが、私の母美代子は、仕事が忙しい中、間違った教えからひとり息子を助けだそうとして必死になって慣れない東京の町を駆けずり回り、私を統一教会問題に詳しい牧師さんや元信者の方々に引き合わせてくれました。その時の出会いがきっかけとなり、はっきりと私は聖書の教えと統一教会の教えの根本的な違いに気づかされました。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

聖書は神の為に生きることではなく、神はいつもともにいてくださり、神と共に生きることの大切さを教えていることを示され、それまでかたく信じていたものが見事に打ち砕かれました。そして、最終的には次の箴言のみことばが示され、真理かどうかの判断をするにあたって自分を基準にすることがいかに危険なことかを教えられ、統一教会を脱会するように導かれました。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。

（箴言　16・25）

しかし、統一教会を脱会してからすぐにクリスチャンになったわけではありません。聖書の学びをする機会もあり、洗礼をすすめられたこともありますが、決断することができないまま通っていた教会から離れてしまいました。妨げになったのは仏教という家の宗教でした。教会で聖書の学びをすることには反対されなかったのですが、先程触れたように、長男でひとり息子でしたので、家の宗教を守る責任があることを理由に洗礼を受けることには反対されていたのでした。その

8人の証し

Unser HERR lebt

結果いつの間にか教会に通うのもやめてしまい、聖書を読むこともないまま年月が経過することになります。

しかし、統一教会を脱会してから二年半後の一九八四年大学四年生の秋、下宿を八王子から府中に移して間もなく心になんとも言えない空しさを感じ、飢え渇く思いが湧き上がり、本棚に眠っていた聖書を手に取り、府中駅の近くの教会に勇気を出して一人で入って行きました。ラジオ牧師で有名な羽鳥明先生が牧会しておられた福音伝道教団の群れに属する府中キリスト教会でした。教会の入り口の看板には、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」（マタイ11・28）と書かれていました。毎週日曜日に礼拝に行くようになり、メッセージを聞いたり、兄弟姉妹との交わりや、週に一度平日の夜にスモールグループを作って分かち合ったり、祈り合っていたことも楽しく、何より「主なる神と共に歩む」ことの喜びを感じるようになっていました。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。（イザヤ　43・4）

イエス様は、いつも共にいてくださり、すべてをご存知の上でこのような者に目をとめて愛してくださっていることに対する感謝の思いが強く、イエス様と共に歩んでいきたいという思いであふれていたのでした。

このようにして「神の為に生きる宗教」から「主なる神と共に歩む信仰」へと導かれたのでした。

次に仕事、結婚、名古屋キリスト集会への導きについてお話ししたいと思います。最初にふれたように私は司法試験を目指して上京したのですが、合計七回にわたって受験するも、不合格を繰り返し、さすがに自分には向いていないことを自覚し、断念しました。目の前が真っ暗になりました。長い間志していたことをあきらめるのはとてもつらくて、涙があふれてきたこともありますが、あきらめたところから神様は全く違

う道を示してくれました。今まで親に対する反発心から家業だけは嫌（いや）だと思っていたのですが、子供のころから親の仕事を見たり、手伝っていたことや手に職があればなんとかやっていけるかもと思うようになり、親の後について修行することにしました。最初の二年くらいは仕事をしていても怒られることばかりでやるせなくなることもありましたが、次第に怒られることも少なくなり、少しずつ自信がついてきました。

そして年齢も三十を過ぎたころから結婚のことが毎日のように家庭内で話題になることが多くなりました。未信者の方とお見合いさせられたことも何回かありますが、クリスチャンホームを築きたいという思いからクリスチャンのための結婚相談所を開設している柿谷カウンセリングセンターに登録しました。そこで出会ったのが後に妻となる麻起子姉妹でした。彼女が登録したのはかなり前のことで登録したこと自体忘れていたようです。しかも「キリスト兄弟団（けいていだん）」の団体名が

だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。（ヨハネ　7・37、38）

喜びのあまり、洗礼を受けることを決心したその日に、すぐに電話で名古屋の両親に「洗礼を受けることにした」と伝えました。当然反対され、すぐさま「今度はどこの教会だ」ということで府中の下宿に駆けつけてきました。教会にも来て、洗礼を受けることを何とかしてやめさせようとして教会の牧師さんや兄弟姉妹に「家の宗教やお墓はどうなるんだ」という気持ちをぶつけていました。しかし、自分のためにいのちを投げ出して愛して下さった神様の愛に満たされていた私は、今度はひるむことなく決心が固いことを伝え、一九八四年十二月、クリスマスの時期に受洗へと導かれました。

書いてあったので、すっかり教会に通っている人だと思っていたら教会を離れてキリスト集会に通っていた人でした。こうして結婚の時期と名古屋キリスト集会との出会いは同時に起こりました。

交際中、家庭集会や喜びの集いに参加させてもらい、組織に束縛されず主イエス様のみを見上げてお祈りしている姿や兄弟方によるメッセージや証しを心から喜んでしておられる兄弟姉妹の姿はそれまでの教会生活では見たことがありませんでした。そして、しばらくは教会と集会と交互に通っていましたが、一九九四年二月に行われた名古屋喜びの集いの後、結婚の約束をしてからは集会での結婚式をあげるべく集会の礼拝に集うことが多くなりました。そして一九九四年十月二十二日名古屋集会の兄弟姉妹が奉仕してくださる中でベックさんの司式で結婚へと導かれました。

また、一九九九年六月四日には待望の長女愛実が誕生しました。愛実は、幼い頃から家族など自分に近い人とはごく普通に話せるのに、慣れない人の前では不安や緊張から話したくても話せない場面緘黙症という症状があります。決して知能が遅れているわけでも身体的、精神的な問題があるわけでもありません。知的な問題がないのに人と挨拶すら満足にできないことが理解できず、親として普通に日常的な挨拶くらいはできるようにしつけようとしていた時期もありました。しかし、元場面緘黙症の方々の話しを聞く機会もあり、人前で挨拶することが一番ハードルが高いことを教えられました。今は主の守りと導きの中で、娘にふさわしい人や居場所が与えられるように祈っています。

最後にキリスト信仰に反対していた母の救いの導きについてふれておこうと思います。私の母は、一九四〇年七月二十五日に名古屋で上に兄二人、下に弟一人の四人兄弟の長女として生まれ、幼少期に今の日進市に移り住みました。男兄弟のなかで唯一の娘でしたので、子ども時代は、男まさりの活発で、積極的に行動する女性だったようです。そのような母は一九五九年四月、十九歳の時に、表具師である父と見合結婚し、その三年後に私が生まれました。父も四人兄弟の長男で舅、姑も含めるとたいへん大人数で生活しなければならず、やりくりするのがたいへんで、苦労が絶えなかったようです。そして生来世話好きだった母は、私が統一教会を脱会してからは、同じように統一教会に入信した子供をもつ御家族の相談を受けたり、統一教会に関連する情報を提供したり、救出活動家を紹介する等の働きもしていました。

そんな母でしたが、二〇一八年一月二十四日に転倒したことがきっかけで、救急車で名古屋医療センターに運ばれ、数時間に及ぶ検査の結果三か所程頸椎に圧迫骨折していることがわかると同時に間質性肺炎に冒されていることがわかりました。

そして名古屋医療センターに入院しているときに、かつて四十年間統一教会の信者だった名古屋キリスト集会のある方から、以前その方が自費出版された「いつもいっしょ」というタイトルの詩集をいただき、何度も読み返していたようです。ある時、母が直接その方に「わたしのような者でも救われることができるのかしら」と問いかけたことがあり、「もちろんですよ。死ぬ一秒前でも『神様にごめんなさい』と言えば救われることはできますよ」と応えてくださり、それを聞いた母はとても安心した様子でした。

そして、集会の方たちとの交わりの中で、「今まで神様に背を向けて生きてきてごめんなさい」、「自分のわがままのためにイエス様が身代わりとなって死んで下さってありがとう」、「これからもよろしくお願いします」と素直に告白することができました。本当に母は、神様の恵みとあわれみによって救いにあずかることができたのだと思わされました。

先程触れたように、元気なときにはキリスト信仰に反対していた母であり、お祈りをともにすることもな

8人の証し

Unser HERR lebt

かったですが、病を負ってからはできるだけ母と別れるときには、私が御言葉を一か所読んでから、母の手をしっかり握ってお祈りし、母も「アーメン」と応答してくれるようになりました。集会の皆さんとの交わりとお祈りのおかげで幼子のような素直な心が与えられたのだと思います。

またお見舞いに来て下さった方から「苦しいときにはイエス様に助けを求めればいいですからね」と語りかけて下さったことがあり、それに対して「『イエス様、ごめんなさい。ありがとう』と言えばいいんですよね」と母が答えたという話を聞いて、確かに神様が生きて働いて導いておられると思わされました。

二〇一八年十一月十一日午前三時半頃、母は平安のうちに天に召されました。葬儀は名古屋集会の兄弟姉妹のご奉仕により集会で行わせていただき、また翌年二〇一九年三月二日には、「名古屋喜びの集い」において記念会を執り行なわせていただくことができました。

今は、母との天国での再会を待ち望みつつ、主の永遠の守りと導きを信じて歩んでいきたいと思います。

主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

（詩篇　121・7、8）

成田 宗男（なりた むねお）
一九六二年名古屋市生まれ、愛知県日進市在住、
中央大学法学部卒業
現在 表具師、（有）尚美堂 代表取締役
妻　麻起子（まきこ）
長女　愛実（まなみ）

私たちに将来と希望を与えてくださるイエス様

成田 麻起子



中央が麻起子さん、キリスト集会の方々

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

（詩篇　103・1、2）

私の今までの人生を映像にすると、私の中にあるイメージがあります。大学入学までは白黒の映像。大学入学後はカラーというものです。それは、「イエス様との出会いによって」なのではないか、と思っています。

はじめて親元を離れての大学での寮生活、四人部屋で、一人分の居場所は畳一畳の布団を敷くスペースと押入、机と本棚が収まる勉強スペースだけでした。最初はホームシックにはなったものの、人と一緒に過ごす生活にも慣れてきて、本当に思い出深い宝物のような楽しい四年間でした。人生や生きるとは何なのかということを真剣に考えたり、語り合ったりする時間や

友人に恵まれました。その中の一人にクリスチャンの女性がいました。私は彼女の下宿によく泊まりに行ったり一緒に自炊してご飯を食べたりしながらいろいろなことを語り合いました。彼女はよく「お祈りしていい？」と言い一緒にお祈りしました。といっても私は、彼女のお祈りを聞くだけでしたが、その「お祈り」は私にとって最初はびっくりするものでした。目に見えない神様に、まるでそこにいるかのように語りかけ始めるのですから。でも、その「お祈り」を聞いているのは心地よく、神聖な気持ちになりました。そして、自分でも心の中で事あるごとにお祈りするようになりました。でも彼女みたいに人前でお祈りするのはとても恥ずかしく、なかなかできませんでした。また私にはひとつの悩みがありました。それは、クリスチャンたちが「イエス・キリストにしか救いがない」と言うことが、どうしても受け入れられなかったのです。世界中にはたくさん宗教があり、それぞれ神様を信じて一生懸命生きているわけだから、結局は、同じひとつの神様につながるし、神様はそれぞれの文化に応じて姿を現されているのではないか、「それで良いのでは？ キリスト教のその排他主義だけは、なんとかしてほしい」と切に思っていました。

この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。

（使徒　4・12）

そんな私がどうしてイエス様を信じるようになったか自分でも不思議です。あるとき、先程のクリスチャンの友達と、ＫＧＫ（キリスト者学生会）の先輩がたと、夜通し語り合うことがありました。明け方、散歩しようということになり、ある公園に来ました。彼女たちは何かあるたびによくお祈りしていました。輪になって順番に祈り、そのお祈りを聞いているのが大好きでしたが、そのときには、私も祈らなくてはいけないような雰囲気になっていて、はじめて、人の前でイエス様にお祈りをしました。「私はイエス様だけが神様だというのは嫌ですが、もしもあなただけが本当の神様なのでしたら、どうかわかるようにしてください」というような内容だったかと思います。正直に心のままをイエス様にお話しました。

その、はじめての人前でのお祈りをしたその日の夜だったのか、数日後だったのか、はっきり記憶がありませんが、私はまた、その友達の下宿で語り合い、泊まることになりました。夜中に目が覚めると、とてもあたたかく光輝いた優しい何かに包まれたような感覚になり幸せを感じました。そんな体験ははじめてでした。イエス様のお答えかしらと思いました。あれから三十年以上がたちますが、このような体験はそのとき限りで、それを求めるようなものではないし、私があまりにも前に進めずにいるので、川を越えるようにと神様が与えてくださったのかなと思っています。

人間のもっている罪ということを考えたとき、罪のない人間はいないこと、また、その罪とは、私たちが思っているよりも、ずっと恐ろしいものであること、死後にはだれでも創造主なる神様の前に、さばきの時、総決算のときがあることが書かれています。イエス・キリストは「良い教えを説いた宗教の創始者」ではなく、三位一体（さんみいったい）の創造主なる神様であり、その方が人の姿をとって人間の歴史に介入して来られたことが書かれています。そして、私たちの罪を赦してくださるために十字架にかけられ、死んでくださり、三日目によみがえられました。

また、学生時代に聞いた牧師のメッセージの中で、忘れられない一言がありました。「神は、絶対者である」という一言でした。私のそれまでの神様観とは、この宇宙とその中の地球、大自然の壮大さ神秘さを見る

ときに、神様がいないはずはない、と感じていました。でもこの宇宙や自然、また、人間というものを、なんだか一体化した感じにとらえていて、人間も含めたこの大自然が、神なのではないのかしら、というものでした。でも、決してそうではありませんでした。この宇宙、大自然、生物、人間を造ってくださった神様は、「創造主」なる神様であり、「私たちは、被造物である」ということが、よくわかりました。

また、天に目を上げて、日、月、星の天の万象を見るとき、魅せられてそれらを拝み、それらに仕えないようにしなさい。それらのものは、あなたの神、主が全天下の国々の民に分け与えられたものである。

（申命記　4・19）

言えることは、たとえ疑問を持ったり反対意見を訴えたとしても、イエス様は怒ったりされないし、そのことです。この証しを読んでくださる方にお願いしたいのは、どうかこの福音を聞いて、イエス様に対してへりくだった気持ちを持って、一度ご自分の正直な気持ちを真剣に、直接イエス様にお話しになってイエス様に求めてみてほしい、ということです。

私の幼い信仰生活は、このようにして始まったのですが、とにかく若いときから常識もなく、知恵も経験もなくて、どうやって生きていったらいいか分からず、イエス様に困ったことや問題が起こるたびにお祈りし、周りのクリスチャンの人たちにもお祈りしていただき、なんとか生きてきた、いえ、生かされてきた気がします。その間、キリスト集会との出会いもありました。

大学在学中に教会で洗礼を受けて、地元名古屋に帰ってからは、家の近くの教会にしばらく通っていました。若い人たちが多く、楽しい教会生活でしたが、

何だか飢え渇きを覚えていました。奈良のＫＧＫで出会った方々と違って、あまり深い信仰の話ができないのです。そんなとき、奈良にいたときにいただいた、『光よあれ』の第三集に載っていた方に電話をかけてみました。その方は、吉祥寺キリスト集会の軽井沢バイブルキャンプに誘ってくださいました。はじめてのバイブルキャンプは人で溢れ、はじめて会った人ともそのときはすぐに話ができました。俗っぽい言い方では、「イエス様の話で盛り上がってしまって…」という感じでしょうか。学生時代のように、心が喜びに満たされました。

次の日には、はじめて参加した私のためにベックさんとお話しをする予定が組まれていて、そのときは一対一でのお話しで、ある方の車の中が用意され、お話の中で、ベックさんは「平安時代の人たちは、イエス様の事知らなかったでしょ。だけどその人が、神様ごめんなさい、と頭を下げたら、もう天国だよ」と言われたので、びっくりしました。また、私が「私は、神様のおかげで存在を許されていると思って本当に感謝しています」と話したときの、それに対するベックさんの言葉は、忘れられません。「神様のおかげで存在を許されているというよりは、この世界が出来る前から、選ばれ、愛されているんだよ」と聞いて涙が溢れてきました。それまで、冷静に話をしていましたが、そのときに、「御霊が働かれた」と言うのでしょうか、嬉しくて心は、喜びと感謝の思いでいっぱいになりました。その夜のベックさんのメッセージではずっと泣いていて、購入したばかりのベールの存在に感謝しました。

それまで、私はどこか、「自分が頑張って良い人間にならなくては」「人を愛せる人間になりたい」などと思うのですが、実際には全然できなくて、ダメなことに悩んでいました。また、人から良く見られたいという思いもありました。ですがベックさんとのお交わりのあとからは、自分はダメでも大丈夫、イエス様はどん

8人の証し

Unser HERR lebt

なに不完全でダメな私のことも愛してくれている、ということがよくわかり、また、人の中で成功しなくても、神様との関係があれば満足という思いになりました。

私は、お世話になった教会を離れて、キリスト集会に集うようになりました。そのようなとき、登録していたクリスチャンのための結婚紹介所を通して、のちに主人となる成田宗男兄弟と出会いました。私はそのとき、集会に集い始めたばかりで、イエス様大好き、イエス様に夢中という状態だったので、すぐに集会にお誘いしました。宗男兄は家業である襖屋の仕事をされていました。私は六年半勤めた職業安定所を退職し、結婚に導かれ襖屋の仕事を手伝うようになりました。

一九九九年に、一人娘である愛実が与えられました。

私はもともと、すごい心配性で、出産にも、育児にも小さなこともいちいち心配してしまい、思い煩らっていました。ですが、このような私の心配や思い煩いを週に一度集まる祈り会で皆さんにお話し、一緒に祈っていただくと、不思議なことに小さな問題も、進路などの大きな祈りの課題も、最善に導かれました。

娘はキリスト教系の自由な雰囲気の幼稚園に入園し、楽しく幼稚園生活を送っていましたが、その幼稚園では、毎月誕生月の子供を集め、お祝いしてくれる会が開かれ、保護者たちも招かれました。そこでは一人ずつの園児が、壇上に呼ばれ、将来なりたいものなどを聞かれるというイベントがありましたが、娘は三年間一度も答えることができませんでした。それは場面緘黙症といって、喋ろうとしても喉が締め付けられてしまって声が出なくなる自分ではコントロールできない症状であることがわかりました。

中学入学を控えて、新しい環境に入るにあたり一つのことを私は必死にお祈りしました。それは、「どうか自己紹介で、声が出せますように」ということでした。新しいクラスでのいちばん最初のスタートで、「しゃべれない生徒」という第一印象を皆に与えてしまうのを避けたかったのです。何回も必死にお祈りし、集会の皆さんにも祈っていただきました。でも、結果的には自己紹介で声を出すことはできませんでした。ですが、この必死のお祈りは違うかたちで聞かれていたのでした。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、私の思いは、あなたがたの思いよりも高い。（イザヤ　55・8、9）

自己紹介があったはずの日、ドキドキして帰りを待っていた私に娘は言ったのです。「私、吹奏楽部に入ろうかなあ」。娘の入学した中学は、吹奏楽の強豪校で、全国大会の出場経験もあり、その吹奏楽部の定期演奏会を娘と一緒に入学前に一度聴きに行っていたのです。

そこには同じ場面緘黙症に悩みながらも、三年間部活を頑張った先輩が出演していました。その先輩を応援しようと、演奏会に行ったのですが、その演奏は中学生と思えないくらい素晴らしく、「涙が出るくらい感動した」と、あとから娘は話してくれました。それから中学、高校、大学と十年に渡り吹奏楽は娘の人生の良いパートナーになりました。

いよいよ大学への進路を決めなくてはいけない高三の春、担任の先生から山梨にある都留文科大学に推薦のお話がありました。初めは、県外の大学なんてと問題にもしていませんでしたが、先生からの勧めもあり、一泊二日でオープンキャンパスに参加した娘は、一度挑戦してみてダメだったら諦める、受かったら神様のお導きだと受け止めて、誰も自分を知らない土地でやってみたいと思うようになっていました。その日から私も、主人も、娘自身はもちろん、キリスト集会の皆さんや祈り会の皆さんにも祈っていただいて、みこ

8人の証し

Unser HERR lebt

ころがなりますように、とのお祈りがはじまりました。私は、「みこころでなかったら合格しませんように」とずっとお祈りしていました。一年後、神様のお導きで娘は合格することができ、次のみことばが与えられました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

一年後の春休みに、「全然ホームシックになってない。青春してる」と喜んで電話で話してくれたことは、嬉しかったです。また娘と暮らすようになり、たくさんのコミュニケーションをするようになりましたが、その成長ぶりに驚かされています。大学生活の半分がコロナ渦であって、大変なこともあったのですが、与えられたみことばの真実は変わらないと思わされています。

四年前には、まさか新型コロナによって、これ程世界の状況が変わってしまうとは想像することもできませんでしたが、聖書には、この世界の終わりに疫病、戦争、大地震などの試練、大患難時代といって七年間の大試練のときがこの地上に起こる、と書かれています。その患難時代の前に、イエス様の空中再臨、クリスチャンの携挙という出来事がある、とも書かれています。今の時代がその聖書の終わりの時代に近づいてきていることは、疑うことができない気がします。

コロナ禍によって主人の仕事も影響を受け、経済面での不安も出てきてしまいましたが、娘の就職については、なぜだか全く心配していません。人一倍心配性な私にしては、とても珍しいことです。今まで、小・中・高校・大学と毎回娘にとって最善な環境を用意して守り、導き、成長させてくださったイエス様は、これからのことも必ず最善に導いてくださるという確信が与えられているからです。人間的にも信仰的にも、小さくてダメなものではありますが、神様はその人の「存在」を愛してくださって、親が子供に最善を願うように、いつも心配して応援してくださっています。これからも、目の前にある一歩だけをイエス様の名前を呼び求め、一歩ずつ歩んでいけたら、と思っています。

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりももっとすぐれたものではありませんか。

（マタイ　6・26）

きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありましょうか。

（マタイ　6・30）

だから、神の国とその義をまず第一に求めなさい。そうすれば、これに加えて、これらのものはすべて与えられます。

（マタイ　6・33）

成田 麻起子（なりた まきこ）
名古屋市瑞穂区生まれ、奈良女子大学文学部卒業
西尾職業安定所勤務を経て結婚、愛知県日進市在住
夫　宗男（むねお）
長女　愛実（まなみ）

主は決して正しい者がゆるがされるようにはなさらない

成田 愛実



愛実さん（右）、お母様の麻起子（左）さんと

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

私は、一九九九年六月四日に、父成田宗男、母麻起子の長女として生まれました。名古屋市に隣接する日進市で育ちました。

小さい頃の記憶はあまりありませんが、物心ついた時から私は人と普通にお話しすることができませんでした。私には場面緘黙症といって、話す言葉がわかるにも関わらず、緊張や不安から家族などの親しい人以外とは全く話せなくなってしまう不安障害があります。症状は人によって様々ですが、私の場合は、家族や親戚の人たち、仲の良いお友達以外とは全く話すことができませんでした。周りの人たちは、「どうしてこの子は話さないんだろう、何を考えているかわからない」、と思っていたと思います。何より私自身が、どうして自分はみんなと同じように楽しくお話しすることができないのだろうと思いながら生きていました。普通になりたいと思っていました。

私は中学生の頃から十年間、吹奏楽をやっています。小学六年生の時に、これから行く中学校の吹奏楽部の定期演奏会に行きました。そこで聴いた演奏が忘れられず、私もこんな風に楽器を演奏したい、音に包まれてみたいと思ったことがきっかけです。最初はとても不安でしたが、楽器は練習した分だけ上達し、話すことができなくても表現することができる、私にとってとても平等な空間でした。吹奏楽部のみんなはとても優しく、充実した毎日を送ることができました。高校生になると両親や先生方のサポートのおかげで少しずつ話せることが多くなっていきました。大学では、お友達ともたくさんお話できるようになり、優しくて温かい人たちに恵まれて楽しい大学生活を送ることができました。ここから先の道はどうなっているのか全く想像がつきませんが、心配なことや不安なことはイエス様のところにもっていくことができ、私のことをすべてわかり、心配してくださる方がいるのはとても心強いです。

あなたの重荷を主にゆだねよ。　主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。

（詩篇　55・22）

私は両親がクリスチャンであったため、幼い頃から日曜日毎に名古屋キリスト集会に通っていました。名古屋キリスト集会でも、私はあまりお話しすることができませんでしたが、皆さんにたくさん話しかけてい

いつも緊張してしまい、人の視線が怖くて何も話せなくなってしまう私にとって、本当に救いのことばでした。私が話すのではなく、私の口を通してイエス様が話してくださるということを覚え、肩の荷が下りました。それでも自分の性質上、緊張してしまうことが多く話せなくなってしまうこともたくさんあります。しかし、現状がすべてではないと思えるようになりました。

だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。（マルコ　11・24）

私は何をやるにも臆病で、失敗したらどうしようと先のことばかり考えてしまいます。しかし、聖書には私たちは生まれながらにして罪人だと書かれていることを知りました。

ただき、楽しく通うことができ、二〇一四年三月には、洗礼に導かれました。

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。（エペソ　5・8）

また、集会に通う中で、次のような聖書のみことばに出会いました。

人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。というのは、話すのはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話されるあなたがたの父の御霊だからです。（マタイ　10・19、20）

もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。（1ヨハネ　1・8〜10）

私たちは、ただ自分の罪を告白し「ごめんなさい」と言うことしかできません。しかし、神様は、自分の罪を言い表すならその罪を赦してくださいます。完璧を目指さなくてもいい。間違えたら謝ればいいんだと思えるようになりました。

私の問題はすべてイエス様が心配してくださっているということを知ると、問題が何も解決していなくても私には考えつかないような素晴らしい道が用意されているのだととても明るい気持ちになります。これからも思い悩むことがあると思いますが、いつもイエス様により頼んで、どんなことがあってもイエス様を根拠に大丈夫だと思い、自分には何もできないと思うことばかりでも、私には祈るという選択肢があることを忘れずにいたいと思います。

私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。（ピリピ　4・13）

成田 愛実（まなみ）
二〇二二年 都留文科大学卒業
父　宗男（むねお）
母　麻起子（まきこ）

8人の証し

Unser HERR lebt

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

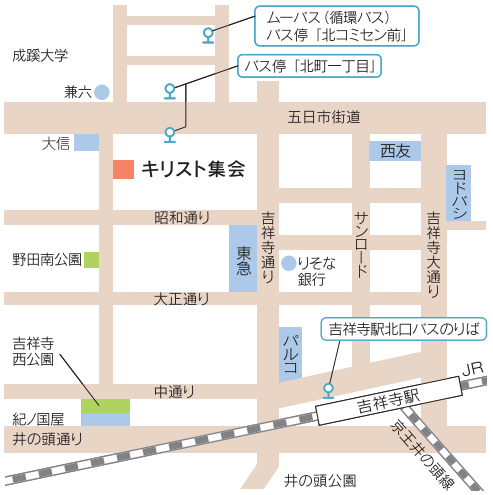
西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

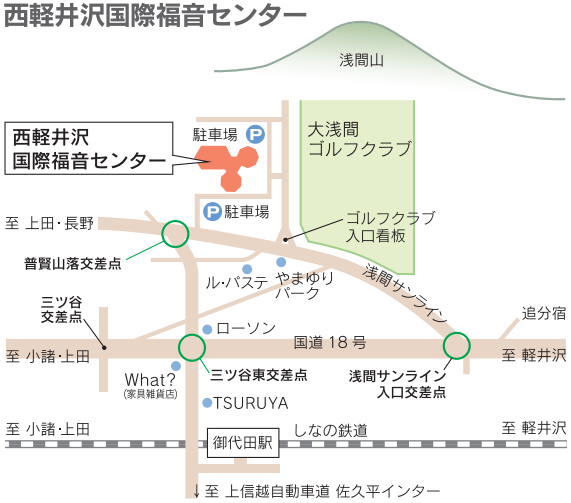
［電話］0422-21-8450（集会所）
東京都 武蔵野市 吉祥寺本町 4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会	10:30 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:30
中高生日曜クラス	9:30

【バス】ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



西軽井沢国際福音センター



アクセス

【鉄道】
しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで 約5分（1000 円程度）
徒歩 約45分＝３Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】
上信越自動車道
佐久平インター下車 約20分（約7km）

■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

西軽井沢国際福音センター
［電話］ 0267-32-6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
［電話］ 0267-32-6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと―ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ ―私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命　がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ31・3）リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

Unser HERR lebt
主は生きておられる

主は生きておられる　第61号

定価100円（税込み）2023年４月10日発行

編集スタッフ	岩本秀造　黒澤錬二　鈴木力
	芳我幸雄　福留伸子　牧野正士
印刷・制作	ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン	飯守恪太郎
発行所	キリスト集会

キリスト集会のホームページ　http://christ-shukai.net/

出版本を購入されたい方、お問い合わせ　webmaster@christ-shukai.net

また、キリスト集会のホームページの「出版物」のサイトからもメールにてお問い合わせが可能です。